

しも きた かた 1 ごう ふんしゅうへん い せき
下北方1号墳周辺遺跡

共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



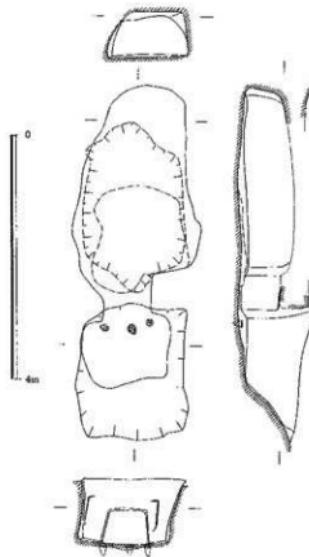
2008

宮崎市教育委員会

表紙写真：下北方地下式横穴第16号（ステレオ写真）

しも きた かた 1 ごう ふんしゅうへん い せき
下北方 1号墳周辺遺跡

共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2008

宮崎市教育委員会



下北方地下式横穴第16号（写真奥は下北方1号墳前方部前面）

序

本書は、宮崎市下北方町塚原における共同住宅建築に伴い、宮崎市教育委員会が平成19年7月から8月にかけて発掘調査を実施した、下北方1号墳周辺遺跡の発掘調査報告書です。

下北方1号墳周辺遺跡は、県下最大級の河川である大淀川と、豊かな穀倉地帯である沖積平野に面した台地上の遺跡です。下北方地区では、その恵まれた立地条件から、先人たちの生活が、古来より連綿と営まれ、県指定文化財の下北方古墳群をはじめ、多数の遺跡が存在しています。住宅地の中に小山のような古墳が点在し、過去と現在が同居するその景観は、一種、奇観でもありますが、同時に、先人達の生きてきた証を大切に守り抜き、共存を果たしてきた地域の方々の思いと努力をさまざまと感じ、深く尊敬と感動の念を覚えます。

本市は合併から3年目を向かえ、中核市としての更なる発展を遂げつつあるとともに、九州の中心都市を目指し、更なる飛躍を志向しております。しかし、都市の発展には開発工事がつきものです。それは現在の我々の生活のためには不可欠な要素ですが、必ずしも文化財の保護とは相容れない面があることもまた事実です。都市の発展の中で、文化財保護の意味をどのように捉え、どのような形で行っていくか、私たちはその方法を常に模索し続ける必要があります。住みやすい豊かなまちと、人類共有の財産である文化財、その双方を未来に伝えることこそ、現在に生きる私たちの重要な責務であると考えます。

本書に報告する遺跡の発掘調査は、夏の暑熱の中、住宅街の中で実施されたものでした。作業に従事していただいた作業員の皆様、ならびに調査の意義に御理解をいただき、様々な便宜をはかっていただいた下北方地区の皆様には、末尾ながら心より御礼申し上げます。

平成20年3月

宮崎市教育委員会
教育長 田原健二

例　　言

1. 本書は宮崎市教育委員会が平成19年度に実施した下北方1号墳周辺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、平成19年7月2日～8月30日の期間実施した。また整理作業は平成19年9月13日～11月12日の期間実施した。
3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

調査総括	文化振興課長	野田 清孝
	主幹兼文化財係長	山田 典嗣
調査事務	主任主事	吉永 大介
調査担当	主任技師	竹中 克繁
	技師	河野 雅人（現地調査）
補助員	嘱託	稻元久美子（整理作業）
"		安藤 五月（〃）
		永友加奈子（〃）
		徳丸 理奈（〃）

現場作業員

星野綾大（宮崎公立大学 学部4年生）

整理作業員

4. 掲載した図面のうち、現場における実測は竹中、河野が、遺物の実測は稻元、安藤が、それぞれ現場作業員、整理作業員の協力を得て行い、製図は竹中と井上誠二（宮崎市教育委員会）が行った。また現場および遺物の写真撮影は竹中、河野が分担して行った。
5. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。

S A : 積穴住居	S D : 土坑	S E : 溝状遺構	S T : 地下式横穴墓
------------	----------	------------	--------------
6. 当遺跡の所在する下北方古墳群中には多数の地下式横穴墓が存在し、その発見順に通し番号による号数が付されている。これに従い、本書で報告する3基の地下式横穴墓についても、その発見順に下北方地下式横穴第16～18号と呼称する。
7. 地下式横穴墓の記述において、本書では竪坑より玄室に向かって「左右」と述べる。
8. 本書掲載の下北方1号墳の実測図は、宮崎大学柳沢一男教授のご厚意により、宮崎大学考古学研究室作成の墳丘測量図を使用させていただいた。
9. 本書の図で使用する方位記号はすべて真北を示す。
10. 本書の執筆、編集は竹中が行った。
11. 出土遺物および掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第I章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 下北方古墳群	1

第II章 調査経過

第1節 調査に至る経緯	6
第2節 当該地における埋蔵文化財の取り扱い	6

第III章 調査成果

第1節 調査成果の概略	7
第2節 古墳時代の遺構と遺物	
a. 下北方1号墳前方部前面	7
b. 地下式横穴墓	15
c. 土坑	26
第3節 歴史時代の遺構と遺物	
a. 土坑	28
b. 溝状遺構	30
c. 遺構外出土の遺物	31

第IV章 考察

第1節 下北方の埴輪	34
第2節 下北方の古代瓦	36

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	2
第2図 下北方1号墳周辺遺跡位置図	3
第3図 遺構配置図	8
第4図 調査区配図	9
第5図 下北方1号墳墳丘前方部セクション図	11
第6図 周溝セクション図	11
第7図 周溝出土遺物	12
第8図 墓輪①	13

第9図 増輪②	14
第10図 S T16実測図	17
第11図 S T16出土遺物①	19
第12図 S T16出土遺物②	20
第13図 S T17実測図	22
第14図 S T17出土遺物	23
第15図 S T18山土遺物	24
第16図 S T18実測図	25
第17図 S D 2 実測図	26
第18図 S D 5 実測図及び出土遺物	27
第19図 S D 4 実測図	29
第20図 S D 4 出土遺物	29
第21図 S E 1 セクション図	30
第22図 遺構外出土遺物	30
第23図 下北方古墳群出土埴輪	35
第24図 下北方町字塚原 景清廟前出土古代瓦	37

図 版 目 次

図版1～20 現地調査	41
図版21～64 出土遺物	51

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧	2
表2 下北方古墳群対応表	5
表3 遺物観察表①（土器）	32
表4 遺物観察表②（鉄器）	33
表5 遺物観察表③（玉類）	33

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

海成地形である宮崎市平野部の地形は、砂丘（砂堤）、沖積平野、丘陵の3種に大別される。下北方1号墳周辺遺跡は、宮崎平野の縁辺を形成する丘陵地帯より、南に突出した舌状丘陵端部の台地、通称下北方台地上に位置する。下北方台地は北方に丘陵を背負い、東方と南方には平野が広がるが、西方には眼下に大淀川が流れる。大淀川は宮崎平野のほぼ中央を東流する県下最大の河川であるが、河口に至る手前において、一旦、南に大きく流れを変え、その後再び東に流れを変える。下北方台地は、この大淀川が南に流れを変える、いわゆる川曲の地点に位置しており、河川利用に際しても、極めて利便性の高い環境にある。

第2節 歴史的環境

下北方地域は平野と丘陵の接する位置にあり、ほぼ全時代的に、多数の遺跡が集中して存在する。下北方台地の北方、舌状丘陵の最高点付近の垂水台地上には、垂水第1遺跡、垂水第2遺跡、垂水公園遺跡、金剛寺原第1遺跡、金剛寺原第2遺跡など、旧石器時代の遺跡が多数存在する。下北方台地の位置する丘陵とは迫を挟んで西方の丘陵南端には、漬田耕作によって発掘調査が行われ、縄文時代早期における柏田式土器の標式遺跡となっている柏田貝塚が、大淀川対岸の跡江台地上には跡江貝塚が存在する。弥生時代においては、下北方台地の中でも高所に占地して下郷遺跡が存在する。下郷遺跡は前期と後期の二度に渡って営まれた環濠集落で、後期においては絵画土器などが出土している。また丘陵頂部に位置する先述の垂水公園遺跡でも弥生時代の土坑墓群が発見されている。古墳時代には下北方台地上に前方後円墳5基を含む下北方古墳群が築かれ、また丘陵斜面一帯には池内横穴墓群、瓜生野横穴墓群が営まれる。古代においては、平成18年度に調査を実施した下郷第4遺跡で、大型柱穴による柱列や竪穴住居、須恵器坑などが出土している。また台地上には古代瓦の散布することが知られており、石川恒太郎氏は、下北方に宮崎郡衙の存在を想定している（野間編 1977）。中世期には、台地の北方、舌状丘陵の基部において、城主上井党兼の日記で著名な大型山城宮崎城が築かれ、江戸時代には、一帯は延岡藩の飛び領地となり、台地の南端に、延岡藩の代官所が置かれた。

第3節 下北方古墳群

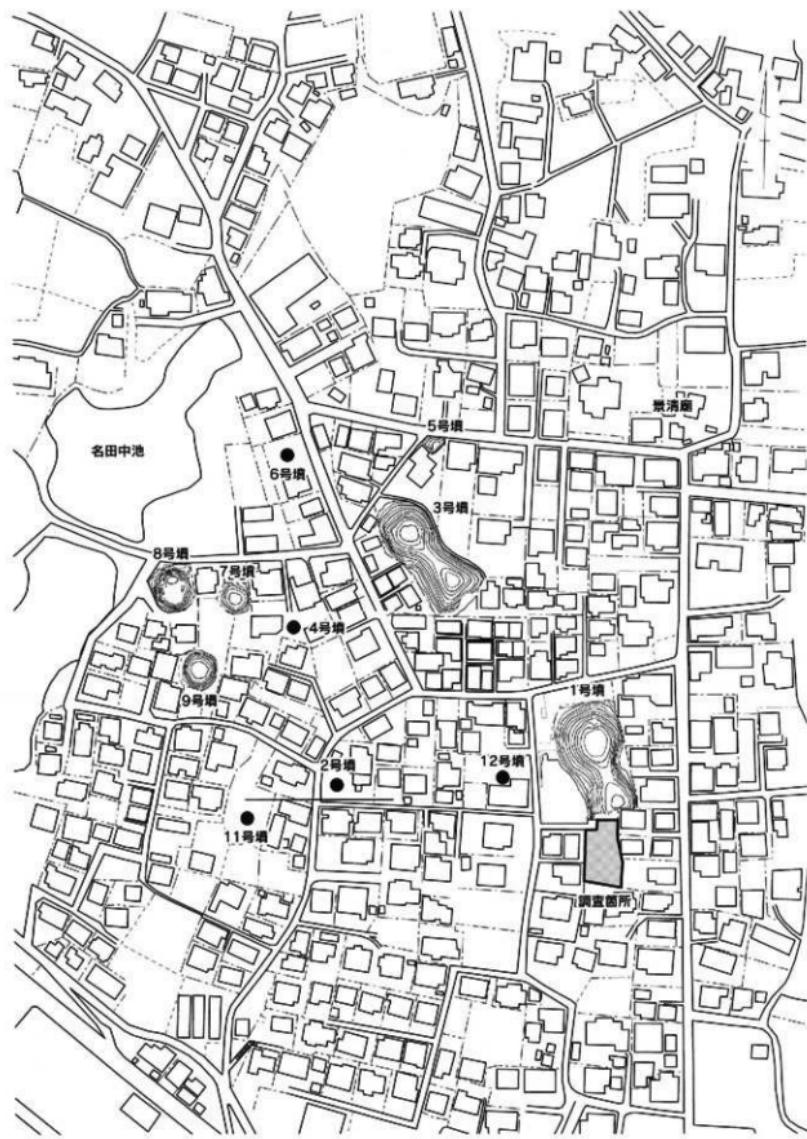
a. 調査歴

県指定史跡下北方古墳群は前方後円墳5基、円墳12基（※指定時 現存は前方後円墳5基、円



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	下北方地上遺跡群	7	宮崎城	13	宮大農園遺跡	19	石ノ迫第2遺跡
2	竹篠城	8	池内横穴墓群	14	船塚古墳	20	跡江城
3	野首遺跡	9	八戸田遺跡	15	船塚遺跡	21	石ノ迫遺跡
4	笠置遺跡	10	下北方14号墳	16	大星敷遺跡	22	跡江貝塚
5	瓜生野横穴墓群	11	下北方13号墳	17	堂原遺跡	23	間越遺跡
6	柏田貝塚	12	垣下遺跡	18	生目古墳群	24	平岩遺跡

第1図 周辺遺跡位置図 (Scale : 1/25,000)



第2図 下北方1号墳周辺遺跡位置図（塚原支群）(Scale : 1/2,500)

墳9基)、地下式横穴墓18基からなる。史跡整備を伴わない古墳群としては、県下でも比較的調査歴が豊富な方ではあるが、住宅密集地中の古墳群という特質上、調査原因の多くは開発や不時発見に伴う古墳周辺の緊急調査であり、墳丘そのものの調査は殆ど行われていない。

なお各古墳には、1939年の県史跡指定時に付された号数の他に、過去における各調査時に独自の号数が付され、極めて煩雑な状況を呈してきた(表2)。現在では、指定番号を用いることにはほぼ統一されており、本書でも、指定時の号数を用いて記述する。

当古墳群中、最初の調査である1951年の日向遺跡調査団による13・14・15号墳の調査は学術調査であり、墳丘上のトレンチ調査も実施されている。古墳群中最大規模(墳長約100m)の前方後円墳である13号墳からは、古墳時代後期に位置づけられる円筒埴輪と人物、動物などの形象埴輪が出土している。また後円部墳丘上にトレンチが入れられたが、主体部は検出されていない(石川他 1982)。また1969年、石川恒太郎らが不時発見に起因する地下式横穴第4号(9号墳)の調査を実施している(石川 1979)。これ以降の調査は宮崎市教育委員会による古墳周溝部における緊急調査であり、1975年に地下式横穴第5号(9号墳)(野間編 1977)、1982年に7・8・9号墳の周溝部分、及び周溝内に構築されていた4基の地下式横穴墓(7号墳:地下式横穴第6・9号、8号墳:第7・8号)(野間 1982)、2003年に12号墳周溝部分(地下式横穴第10号)、2007年に下北方3・5号墳の周溝部分(地下式横穴第11~15号)(金丸編 2008)、および本書で報告する1号墳周溝部分(地下式横穴第16~18号)の調査を実施している。

b. 古墳群の概要

下北方古墳群は宮崎平野の南半部、小地域区分でいう大淀川下流域における主要古墳群の一つであり、古墳時代前期を中心とした大規模古墳群である生目古墳群とは、大淀川を挟んで対岸に位置する。

下北方古墳群は、その立地の違いから、大きく3つの群に大別できる。古墳群の中核を成すのは標高20mの下北方台地上、西半ば中央に密集して存在する、前方後円墳3基、円墳7基からなる塚原支群である(指定時には加えて2基の円墳が存在していた)。前方後円墳である1号墳は墳丘現存長66m、3号墳は68mで、ともに以前から中期段階の埴輪が表採されていた。前方後円墳では他に11号墳があるが、現在では前方部がほぼ消滅しており、規模等、不明である。円墳である9号墳の封土下に構築された5号地下式横穴墓は、玄室の長辺が約5mもある長大なもので、小札鉢留眉底付骨や三角板鉢留短甲、刀剣、変形獸形鏡、垂飾付耳飾、玉類等、豊富な副葬品を持つ。この5号地下式横穴墓は9号墳周溝内から墳丘中心に向かって構築されており、古墳主体部としての地下式横穴墓である可能性が考えられる。

塚原支群の位置する台地の北、標高70mの狭小な丘陵尾根上及びその周辺に位置する越ヶ迫支群(13~16号墳)中、墳長100mの前方後円墳13号墳は、前項のとおり、過去に調査が行われ、後期段階の埴輪が出土している。

下北方台地の南東約1kmの平地には、墳丘現存長77mの前方後円墳船塚古墳が1基のみで存在する。当古墳群中、唯一、平地に立地する古墳で、盾形の周溝・周堤の一部が残る。発掘調査等が行われたことはなく、また埴輪の表採なども知られていないため、時期等不明ではあるが、

下北方古墳群最後の首長墓と考えられている。なお船塚古墳の南西500mに位置する船塚遺跡では、溝中より横ハケを施した円筒埴輪底部片が出土している。

以上、当古墳群では古墳そのものの調査歴は殆どなく、確実な時期の判明する古墳も少ないが、表探資料等から、対岸に位置する古墳時代前期を中心とした生目古墳群が低調となる中期段階より築造が開始され、後期まで存続した首長墓群と捉えられる。前節に触れたとおり、古代郡衙が下北方台地上に存在した可能性もあり、その前代にあたる下北方古墳群の政治史的重要性は極めて大きなものと考えられる。

【参考文献】

- 石川恒太郎他編 1952「日向遠跡調査報告書」第1輯 宮崎県教育委員会
 石川恒太郎 1979「増補 地下式古墳の研究」株式会社ぎょうせい
 金丸武史編 2008「下北方5号墳周辺遺跡」宮崎市文化財調査報告書第68集 宮崎市教育委員会
 野間重孝編 1977「下北方地下式横穴5号」宮崎市文化財調査報告書第3集 宮崎市教育委員会
 野間重孝 1982「宮崎市下北方古墳群をめぐって—古墳周辺調査を中心として—」『宮崎考古』第8号 宮崎考古学会

表2 下北方古墳群対応表

指定番号	文献							古墳内容			
	①	②	③・④・⑤	⑥	⑦	立地	墳形	規模	備考		
1号墳	—	6号墳	1号墳	6号墳	5号墳	1号墳	台地上	前方後円	長72m	埴輪	
2号墳	—	—	2号墳	—	—	—	円				
3号墳	—	5号墳	3号墳	5号墳	6号墳	11号墳	(塚原支群)	前方後円	長68m	埴輪	
4号墳	—	10号墳	4号墳	—	—	—	円				
5号墳	—	3号墳	5号墳	—	—	—	円				
6号墳	—	4号墳	6号墳	—	—	—	円				
7号墳	—	8号墳	7号墳	—	8号墳	—	円	径17.5m			
8号墳	—	9号墳	8号墳	—	9号墳	—	円	径25m			
9号墳	—	7号墳	9号墳	—	7号墳	—	円	径20m	地下式5号 文獻②発見		
10号墳	—	—	10号墳	—	—	—	円		消滅		
11号墳	—	—	11号墳	—	—	—	前方後円か		前方部消滅		
12号墳	—	—	12号墳	—	—	—	円		消滅		
13号墳	1号墳	2号墳	13号墳	1号墳	1号墳	13号墳	丘陵	前方後円	長約100m	埴輪 文獻①調査	
14号墳	2号墳	—	無号墳	—	3号墳	—	(越ヶ追支群)	円	径約15m	埴輪？ 文獻①調査	
15号墳	3号墳	—	15号墳	—	—	—	円		消滅 文獻①調査		
16号墳	—	1号墳	16号墳	—	—	—	円				
無号墳	—	—	14号墳	—	2号墳	—	—	—	—	存在しない	
船塚古墳	—	12号墳	船塚	—	—	—	平地	前方後円	長76.8m		

- ① 石川恒太郎他 1952「宮崎市下北方古墳調査報告書」「日向遠跡調査報告書」第1編
 ② 野間重孝編 1977「下北方地下式横穴5号」宮崎市文化財調査報告書第3集 宮崎市教育委員会
 ③ 北郷泰道編 1987「船塚遺跡」宮崎大学跡地遺跡発掘調査報告書Ⅰ 宮崎県教育委員会
 ④ 永友良典・津路久美子編 1990「宮崎市文化財調査研究報告書」III「下北方古墳—遺物編」 宮崎県総合博物館
 ⑤ 前方後円墳研究会発行委員会編 1992「前方後円墳集成」山川出版社
 ⑥ 宮崎県編 1993「宮崎県史」資料編 考古2 宮崎県
 ⑦ 九州前方後円墳研究会実行委員会編 2000「九州の埴輪 その変遷と地域性」第3回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集
 ⑧ 九州古墳時代研究会実行委員会編 2003「宮崎平野の古墳と古墳群」第29回九州古墳時代研究会(宮崎大会)資料集
 ⑨ ④・⑤は分布図における号数
 ⑩ ⑪ は「被遺傳」(2000年)にて指定番号に訂正

第Ⅱ章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成16年8月16日、共同住宅の建築計画に伴い、(株) [] より、宮崎市下北方町字塚原5855-2外における文化財所在の有無について、宮崎市教育委員会教育長あてに照会がなされた。開発予定地は県指定史跡「宮崎市下北方古墳」第1号に隣接し、当該古墳に伴う遺構の存在する可能性が考えられたため、市教育委員会では、既存建物の撤去等との兼ね合いもあり、平成16年12月16日と平成18年5月24・25日の2度に分けて試掘調査を実施した。結果として、下北方1号墳の周溝を始め、事業予定地のほぼ全面において遺構の存在が確認されたため、当該地を周知の埋蔵文化財包藏地「下北方1号墳周辺遺跡」とし、市教育委員会、県文化財課、(株) [] の3者で、協議を重ねた。結果、建物建築によって遺構の破壊される箇所については本発掘調査を実施し、他の部分については現状保存の処置を探ることとなり、平成19年7月2日～8月30日の期間、建物建築を実施する440m²を対象として本発掘調査を実施した。また現地調査終了後の整理作業は平成19年9月13日から同年11月12日まで実施した。

調査終了後、共同住宅の建築工事が開始されたが、平成19年9月25日、工事に伴い、当該地と古墳墳丘との間に設置されていたブロック塀が除去され、墳丘断面が露出していることが判明した。当該地における埋蔵文化財の取り扱いに関する事前の協議には含まれていなかった事柄のため、急速、開発事業者と市教育委員会、及び県文化財課との3者で協議を行い、市教育委員会が露出した墳丘断面の実測調査を行うこと、及び事業者がブロック塀を現況の位置に復することを取り決めた。これを受け、平成19年10月9日～11日の期間、市教育委員会で確認調査として墳丘断面の実測調査を行った。

第2節 当該地における埋蔵文化財の取り扱い

当該地は前方後円墳である県指定「宮崎市下北方古墳」第1号の前方部前面に隣接する。事前の試掘調査の結果、墳丘側の事業地北半において1号墳の周溝が確認され、また南半においても溝状遺構等が確認された。当該事業は約680m²の南北に長い長方形形状の敷地内において、共同住宅2棟を南北それぞれに建設するものである。建物建築部分440m²については、遺構が工事の影響を受けるため、本発掘調査による記録保存を行い、それ以外の約140m²については、工事による遺構への影響がないため、現状保存とした。

第III章 調査成果

第1節 調査成果の概略

調査区全体で古墳周溝、地下式横穴墓3基、土坑3基、溝状遺構3条を検出した。古墳周溝は下北方1号墳に伴うものであるが、検出範囲では全面的に削平を受けており、最深で50cmほどしか残存していない。また、本来的に下北方1号墳の前方部墳丘端部の一部も調査範囲内に存在したはずであるが、完全に削平され、残存していない。周溝内からは川西編年IV期初期段階の円筒埴輪片が出土している。地下式横穴墓のうち、1号墳の周溝内から墳丘封土下に構築されている第16号は、玄室長辺3m強の大規模な妻入り型の地下式横穴墓である。玄室内には古墳時代中期後半の土師器とともに鉄劍、玉類が副葬されていた。他の2基はともに1号墳の周溝外に作られた古墳時代後期のものである。古墳時代以外では方形のコーナー部を持った古代の溝があり、調査区内からは古代瓦も出土している。

第2節 古墳時代の遺構と遺物

a. 下北方1号墳前方部前面

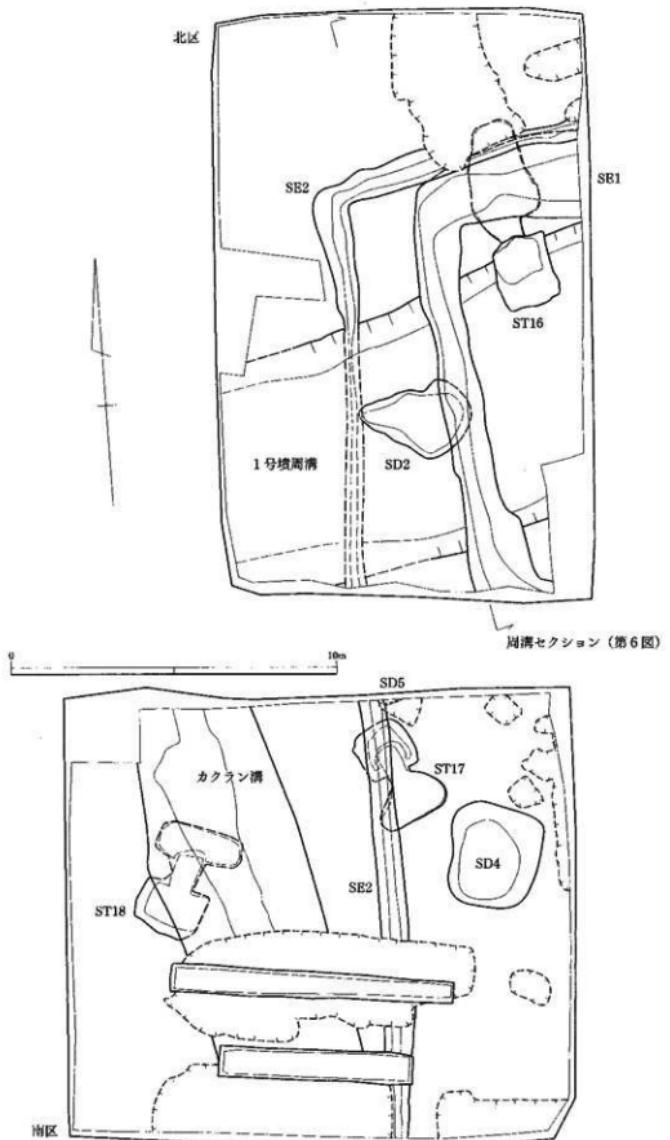
墳丘部分（第5図）

第5図はブロック塀の倒壊により露出した、下北方1号墳の現況における前方部前面のセクション図である。上半を占めるII層は前方部斜面に建てられた御堂や、ブロック塀設置の際の擾乱、墳丘からの崩落土である。西半に見られるIII～VII層は墳丘盛土で、褐色粘土と黒色粘質土を主体とした層が、互層状になっており、墳丘構築の版築である。露山面の確認調査という性質上、壁面の削り込みが出来なかったため、今回、版築が確認できたのはこの部分だけである。西端のV・VI層によって形作られた側面のラインは、次項に述べる本調査時に検出した周溝内側の立ち上がりと位置的にほぼ一致しており、墳丘本体の斜面にあたる。VII～XI層は地山である。アカホヤ層以下の地山を整形したのち、版築によって墳丘が構築されている。

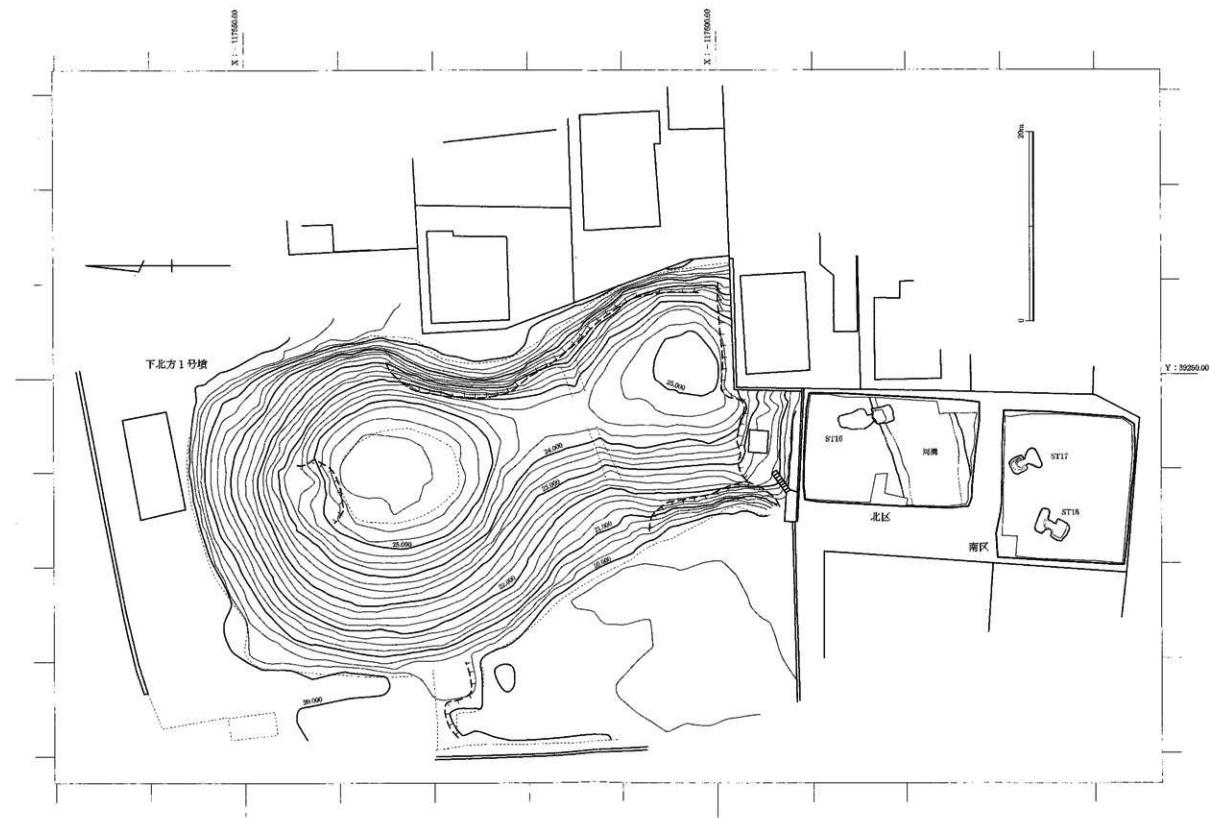
周溝部分（第6図）

土層堆積状況の観察により、周溝部分においては、古墳構築後、少なくとも2度にわたる地形の改変があったと考えられる。第6図中、ラインAは近世の溝S E 2との関係より、近世以降の削平（整地）ラインである。ラインBは後述のIV層との関係より、霧島高原スコリア（10～13世紀降灰 霧島火山起源）降灰直前の時期（今回の調査範囲における出土遺物との関係より、古代である可能性が高い）における削平（整地）である。ラインCは古墳構築時の周溝本体の断面ラインであるが、前記3度の削平により、最深で50cmほどしか残っていない。周溝底面は幅約6.5mで、内側・外側ともに比較的緩やかに立ち上がる。

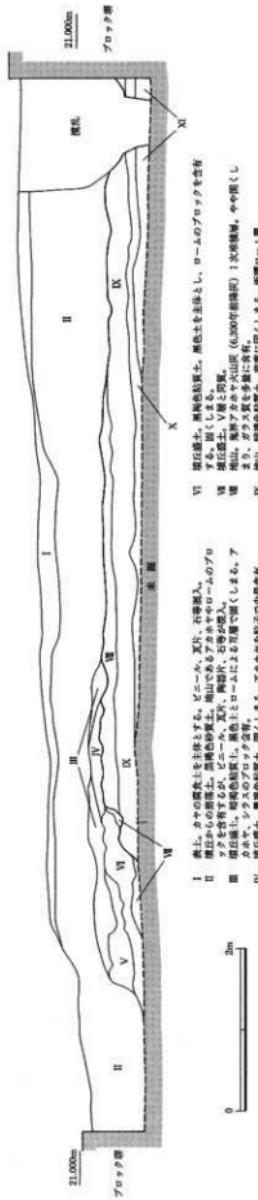
ラインA上のII層はS E 2堆積土であり、近世陶磁を含有する。ラインB上のIV層は径2mm程



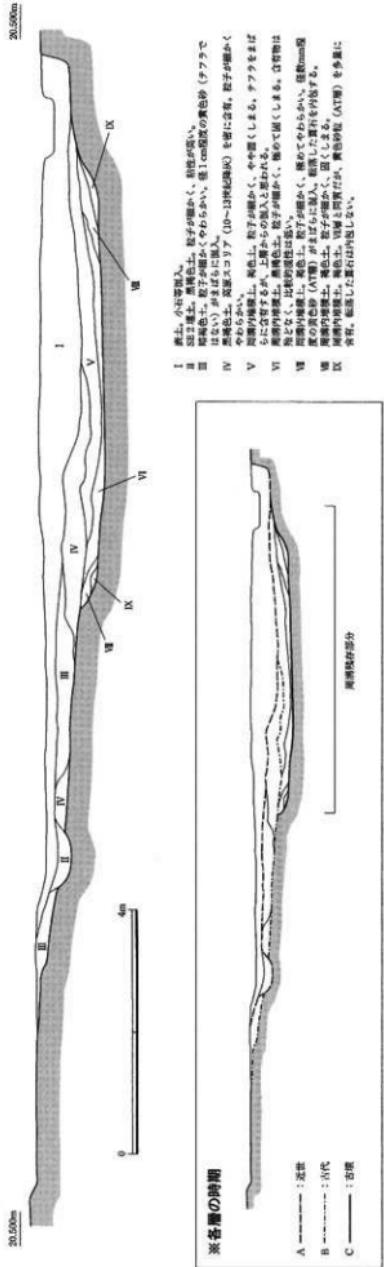
第3図 造構配置図 (Scale : 1/150)



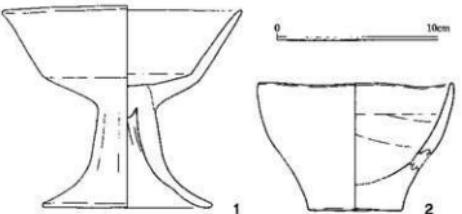
第4図 調査区配置図 (Scale : 1/400)



第5図 下北方1号境堀前方セクション図 (Scale : 1/60)



第6図 周辺セクション図 (Scale : 1/80)



第7図 周溝出土遺物 (Scale : 1/3)

度の明黄褐色テフラ（露島・高原スコリアと思われる）を密に含有する。周溝内堆積土は上位のV層と、周溝底面直上のVI層の2層に大別され、さらに周溝内側・外側双方の立ち上がり部分においては、VI層下に微少な堆積が観察される（VII～X層）。上位のV層中には、IV層に含まれるものと同質のテフラがまばらに含有され、埴輪片や土師器高杯（第7図1）を出土した。VI層は周溝内最下層で、転落した葺石を含有する。埴輪片、土師器浅鉢（第7図2）が出土している。また、周溝内側の立ち上がり部分に堆積したVII層には、墳丘上から転落した葺石が大量に含まれる。

【出土遺物】

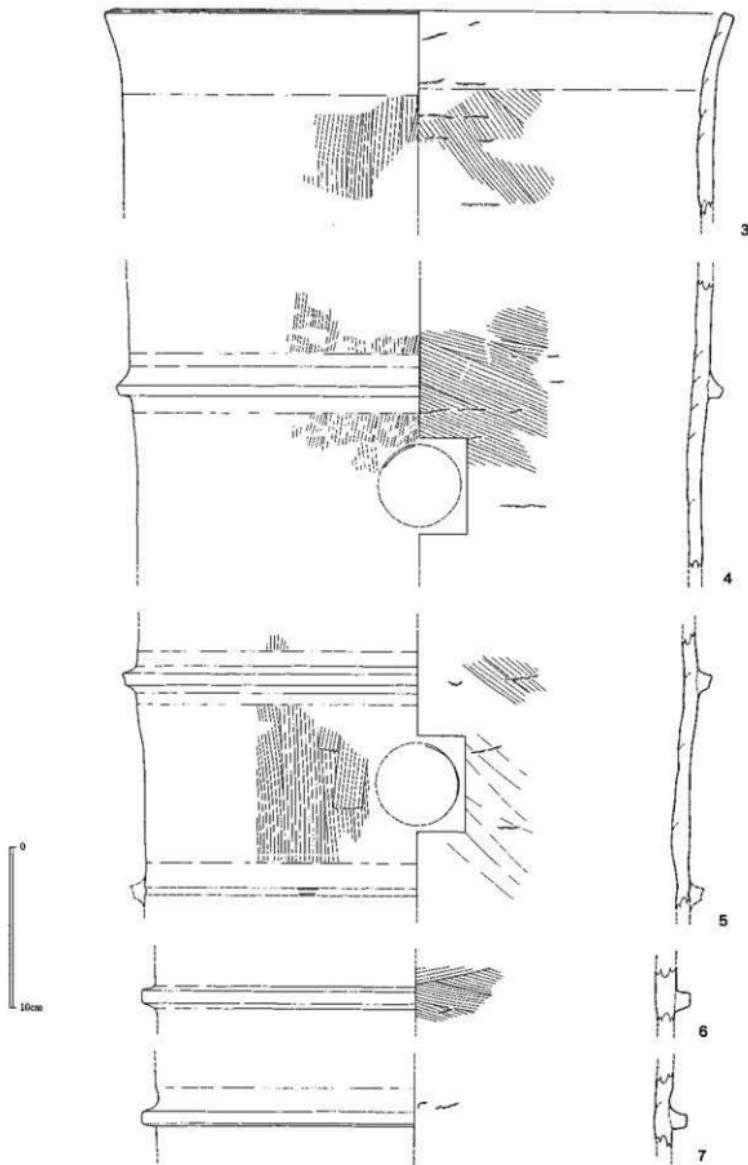
・土師器（第7図）

1は周溝内堆積土第V層出土の土師器高杯である。全体に摩滅が激しい。TK208ないしTK23型式並行段階。2は周溝内堆積土最下層であるVI層出土の土師器浅鉢である。胎土中には径2mm以下の砂粒を多量に含有する。

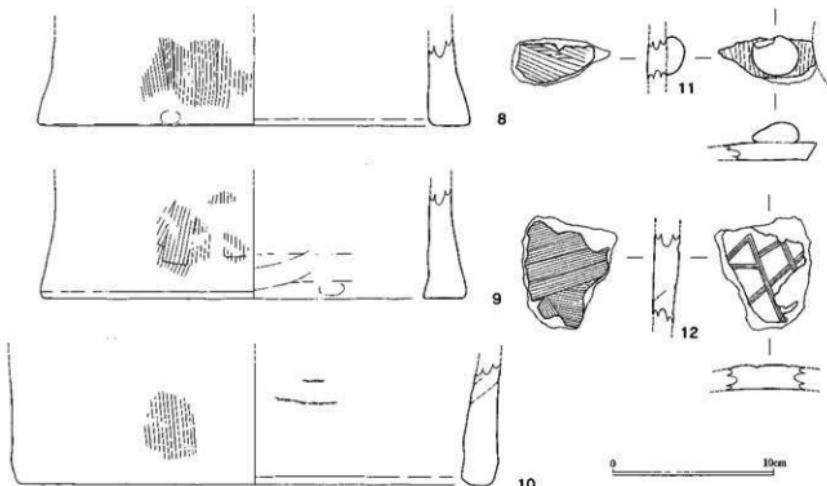
・埴輪（第8・9図）

周溝内堆積土、周溝底面に構築されたS D 2（2号土坑）、地下式横穴墓壁坑埋土、地下式横穴墓玄室内崩落土、攪乱土坑より出土した。いずれも流れ込みによるもので、原位置出土のものはない。3～10は円筒埴輪片、11・12は形象埴輪片である。円筒埴輪は口縁部、胴部、底部と一通りが揃い、全形を復原することは可能である。底部からほぼ垂直に近く立ち上がり、口縁上部においてわずかに外側に屈曲する。胴部径は35cm前後（反転復原値）と非常に大型であるが、器壁は薄く、きわめて精緻な作りをしている。段数、条数を復原できるものはないが、突帯設定技法による沈線が観察される5より、突帯間隔13.5cm前後であることが知れる。スカシ孔は円形で復原径5cm程度と、突帯間隔との比率では、小さめである。1/4周が残存するものではなく、スカシ孔の配置は不明である。突帯は突出度の高い断面台形状で、外面調整は条痕の浅い1次調整タテハケによる。いずれの破片においても黒斑は見られず、川西編年IV期の古い段階に位置付けられる。

3～5は色調、胎土、調整（ハケ5条/cm）が共通しており、同一個体の可能性が高い。3は普通円筒埴輪口縁部片である。垂直に近く立ち上がったのち、上部がわずかに外側に屈曲する。外面調整はタテハケののち、上部は5cmほどの幅で丁寧な横ナデを施し、内面はナメハケののち、外面の横ナデに対応する上部5cmほどは丁寧な横ナデを施す。4は胴部片で、一部を除き、突帯は剥離している。残存する突帯は断面台形状で突出度が高い。突帯貼り付け時に手元が



第8図 墓輪① (Scale : 1/3)



第9図 墓輪② (Scale: 1/3)

狂ったのか、やや下向きである。突帯が剥離した器表面においては、突帯設定技法に伴うものと思われる幅3mmほどの浅い沈線が巡る。スカシ孔が一部残存しており、復原径は約5cmである。外面調整は1次調整タテハケであるが、ハケを施したのち、全体に軽度の横ナデが施されている。内面調整は横位に近いナナメハケである。内面においては、1.8cm前後の幅で粘土紐の接合痕が観察できる。5は胴部片である。突帯は断面台形状で突出度が高い。下段突帯は剥離して残存していないが、剥離面には4と同じく突帯設定技法に伴うものと思われる幅3mmほどの浅い沈線が観察できる。スカシ孔が全体の1/3ほど残存しており、復原径は4と同じく約5cmである。外面調整は1次調整タテハケであるが、4と異なり、ハケののちのナデは施されていない。内面調整は上部に一部ナナメハケが残るが、大部分は指ナデのみの調整である。内面調整の施され方から、4より下位の部位である可能性が高い。

6、7は突帯を含む胴部片である。ともに突帯断面形状は台形で突出度が高い。6は摩滅が激しく、外面の調整は不明、内面調整は横位に近いナナメハケである。7も同様に摩滅が激しく、調整は内面、外面ともに不明である。突帯形状は断面台形を基本としながらも、やや不整形である。また外面における突帯下部の貼り付けがやや粗雑で、接合痕が明瞭に残る。

8～10は底部片である。8は下部が大きく肥厚し、断面三角形状の破片である。外面調整はタテハケ、内面調整は摩滅により不明である。底面に敷物の圧痕等ではなく、平滑に仕上げられている。9は周溝内堆積土VI層より出土した。8と同じく下部が大きく肥厚している。外面調整タテハケ、内面調整はナデである。8と同じく底面は平滑に仕上げられる。10は前記の個体と異なり、

頗著に肥厚してはいない。全体に摩滅が激しいが、外面調整のタテハケは見て取れる。9・10と同じく底面は平滑に仕上げられる。

11、12は形象埴輪片である。11は外面調整タテハケ、内面調整ナナメハケの円筒部外面に粘土玉が貼り付けられスカシ孔の痕跡もある。内面にハケメがあることから、具象的なものよりも円筒系の形象埴輪の部分である可能性が高い。12は外面に格子状の文様が沈線で施される。内面調整はナナメハケである。盾形の一部かと考えられる。

b. 地下式横穴墓（S T）

S T16（下北方地下式横穴第16号）（第10図）

1号墳の前方部前面主軸上に位置する妻入り型の地下式横穴墓である。墳丘側の周溝立ち上がり部分に竪坑を、墳丘下に玄室を構築し、竪坑上端際から玄室奥壁までの平面規模は5.8mと非常に大型である。玄室天井の大半は崩落し、玄室は埋まった状態にあった。また前項に述べた通り、1号墳周溝の立ち上がり部は後世の削平を受けており、本造構の竪坑部分もまた、上部がある程度の削平を受けている。

竪坑の平面形はやや縦に長い長方形で、上端の長軸2.2m（残存部）、短軸1.75m、底面は反対にやや横に長い長方形となり、長軸1.45m、短軸1.05mである。横断形状における壁面の立ち上がりは、左壁がほぼ垂直に近いのに対し、右壁は底面近くで垂直に立ち上がったのち、やや外反しながら立ち上がる。縦断形状においては、羨門側は垂直に近く立ち上がるが、外側はスロープ状に作り出されている。竪坑底面の羨門手前には、閉塞用の板を押さえるために杭を打ち込んだものと見え、断面楔形で径10cm強の小型のピットが3基検出された。また羨門側の壁には、閉塞板をはめ込むための浅い窪みが羨門を挟んで2ヶ所に見られる。この底面におけるピットと壁面の窪みより、横100cm、縦70cm、厚さ6cm（竪坑底面における壁の立ち上がりとピットとの間隔）の長方形の板（ないし複数の板、丸太を同規模まで積み上げたもの）を閉塞に用いたと推定される。

羨門は台形状であるが、底面はややすり鉢状である。天井部はほとんど崩落しているが、一部残存部分より、平坦であったことが伺える。上端幅60cm、下端幅80cm、高さ60cmである。羨道部分は長約60cmである。袖部は、右側が後の立つ方形状に作り出してあるのに対し、左袖は羨道半ばからゆるやかに開きながら玄室左壁につながり、極めて対称的な造りになっている。

玄室は平面不整形な縦に長い長方形で、底面における軸長最大3.05m、幅は最大2.1mである。羨門の奇異な造りに続き、玄室の作りも統一感がない奇妙な構造をしている。右袖部の羨門側の壁や玄室奥の右側などは、壁面が垂直に近く立ち上がり、各所に稜の入るシャープな仕上げになっているのに対し、他の部分は壁面が内湾して立ち上がり、丸味を帯びた構造になっている。平面形においても、右側が直線状に近いのに対し、左側は手前で大きく膨らみ、奥に向かって収束していく橿円形に近い。また右壁には浅い窪みが造られ、この部位における壁面の立ち上がりもまた内湾気味である。

玄室床面には、羨門側から玄室中ほどまで、地山であるシラス土、ローム土と赤色顔料が混然となった貼り床が厚さ5cmほど構築されている。玄室天井は大半が崩落していたが、奥壁側では50cmほど残存している。縦断形ではやや膨らみながらもほぼ平坦に近いラインが見て取れ、

のことから、玄室天井はドーム状や屋根状の表現などなく、ほぼ平坦であったと思われる。天井残存部分における横断形状は、右壁が垂直に近く立ち上がり、左壁が緩やかに弧を描きながら立ち上がり、そのまま穹隆状の天井を形成するような印象を受け、羨道袖部と同じく、左右非対称な構造をしている。床面から天井までの高さは、天井残存部分において最大で74cm、復元でも最大85cm程度と考えられる。

なお、本遺構の玄室天井崩落の契機、および玄室内における土の「堆積」は、後述する古代の溝SE1の構築にあったと思われる。SE1は直角に近いコーナーを持つ溝で、1号墳周溝を縦断した後、直角に曲がり、地下式横穴16号の玄室上を横断する。前項で述べた、調査区全体に見られる古代時の整地行為は、前方部の墳丘そのものもある程度削平しているが、この整地時より前に玄室の天井崩落が起こっていれば、玄室は墳丘下にあるため、当然、墳丘構築土が玄室内に堆積したはずである。しかし、玄室内の埋土は埴輪片を含んだ黒色土が大半を占め、床面近くにおいては本来玄室天井を形成していた地山のブロックが堆積していただけであった。ゆえに玄室天井の崩落は、古代の整地行為による墳丘削平時ないし削平後に起こったと考えができる。また玄室内埋土は周溝堆積土V・VI層に酷似し、埴輪片を含有することから、周溝堆積土そのものである可能性が高い。玄室内堆積土は、床面から天井まで単層に近く、開口した天井部分からの漸移的な自然堆積とは考えにくく、周溝堆積土を用いた人為的な埋め戻しが想定される。また古代時の溝SE1が玄室堆積土上に構築されていることから、可能性として、SE1構築中に、事故的に開口し、地中の空間となった地下式横穴墓の玄室に、同じく溝構築によって堀り上げられた周溝堆積土を充填したことも想定される。

【出土遺物】

遺物は玄室内羨門寄りの位置に集中する。土師器は特に右壁際に集中するが、逆さまや横倒しの状態のものもある。鉄剣は玄室軸において、切っ先を羨門に向けた状態で検出された。また鉄剣の下より、滑石製の白玉が82点検出されている。遺物はすべて床面出土ではあるが、前述のとおり、古代時に天井部分より開口した可能性があり、厳密に原位置を保っているとは判断しにくい。

・土師器（第11図）

小型器種14・15及び高杯18はTK216～TK208型式並行段階、小型器種16・17及び高杯19～22はTK208～TK23型式並行段階である。

13は古留系の甕である。調整は全体にきわめて丁寧で、器壁もきわめて薄い。ただし、形態的には口縁部の外傾度が低く、古留式後半段階の形状である。

14は小型の丸底壺で、須恵器短頸壺に似た形状を呈す。外面の一部に赤色顔料が付着するほか、内面は口縁部から底部まで赤彩が顯著である。甕13と胎土、色調、調整が共通する。

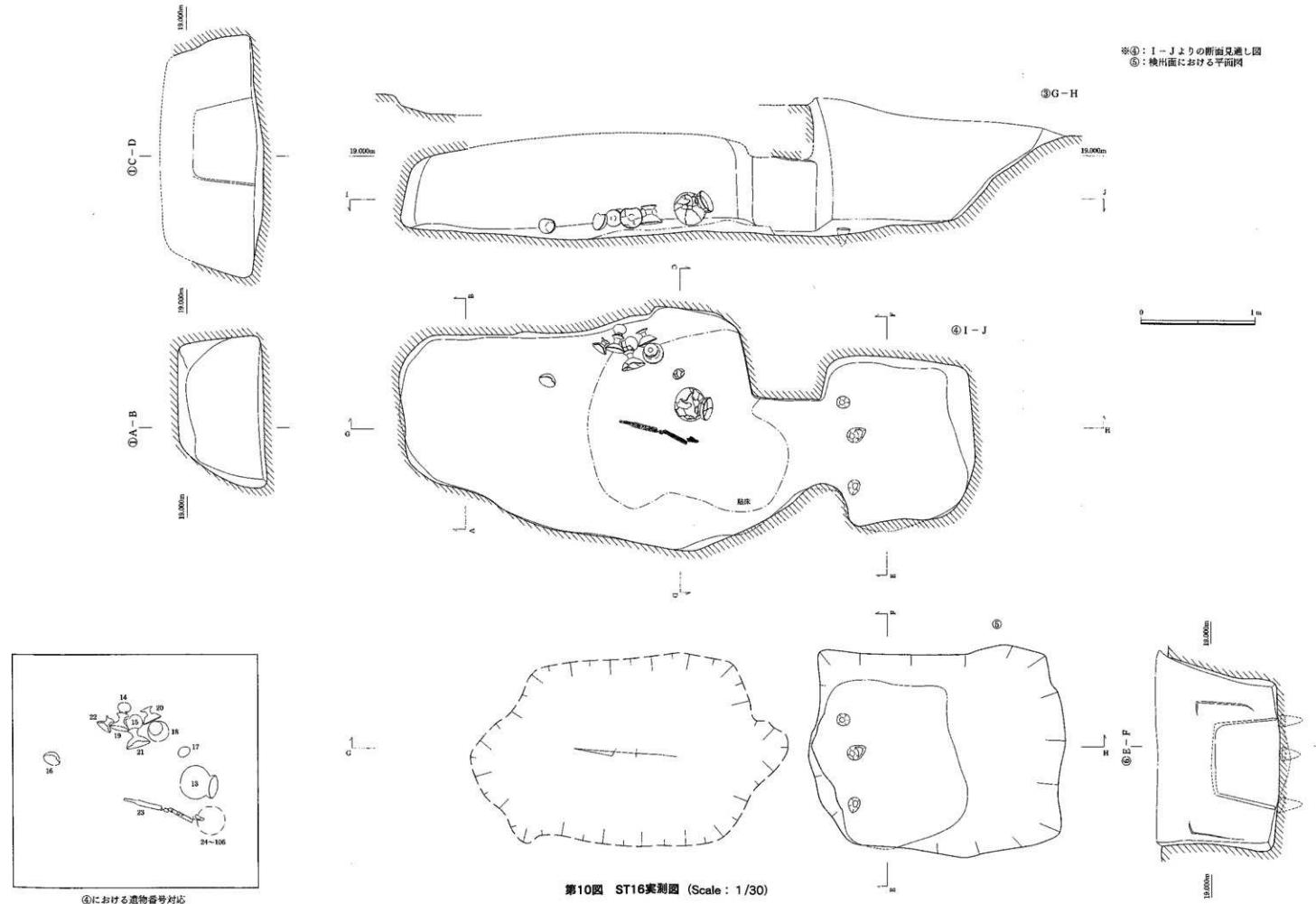
15は小型の丸底壺である。胴部は球形で、やや内湾気味の口縁部の外傾度は低い。外面とともに内面も口縁部から体部の肩口までミガキが施される。外面及び口縁部内面に赤色顔料が付着する。

16は浅鉢である。外面には赤彩の痕跡があり、内面にも赤色顔料が微量に付着する。

17は小型の丸底杯である。底面はやや平坦に整形され、口縁部の屈曲部分は内面に明瞭な稜が入る。

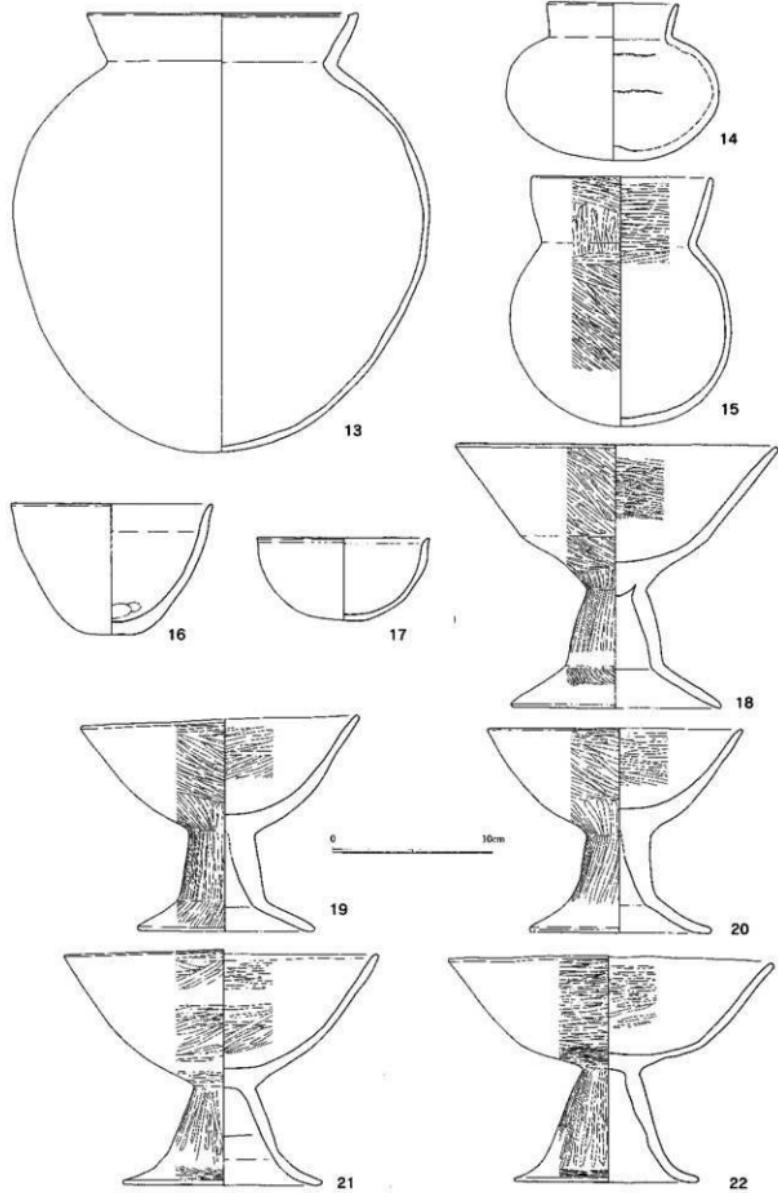
18～22は土師器高杯である。いずれも外面及び杯部内面はミガキによって仕上げられ、柱状

*④：I - J よりの断面見通し図
⑤：検出面における平面図

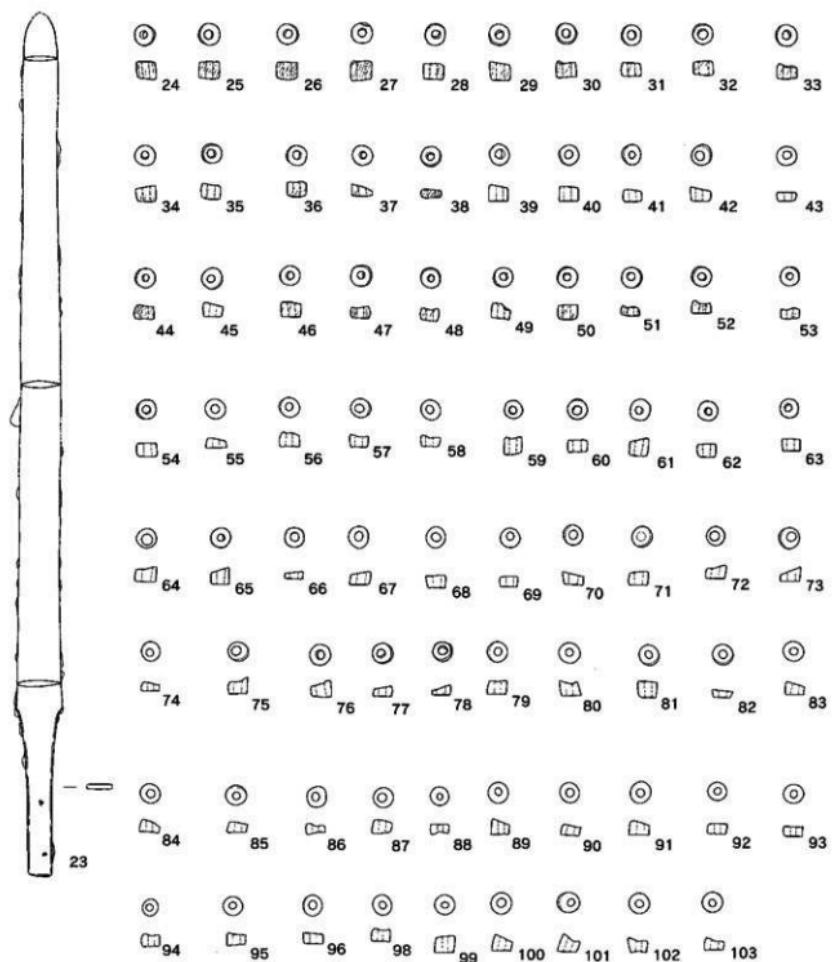


第10図 ST16実測図 (Scale : 1/30)

⑨における遺物番号対応



第11図 ST16出土遺物① (Scale : 1/3)



第12図 ST16出土遺物② (23 : Scale 1/4 · 24~103 : Scale 1/1)

部内面及び裾部内面はナデである。18は口縁部と体部の境に稜が入り、柱状部はエンタシス状に膨らむ。坏部内面には赤彩が施される。19~22は口縁部と体部の境に稜が入らず、明らかに18に後出する。19、20はやや小型で、柱状部と裾部の境において、内面に明確な稜が入る。19は坏部内面に赤彩が施される。21、22は柱状部と裾部の境における屈曲が緩く、脚台部断面はハの字状に近い。21は坏部内面に赤色顔料がわずかに残り、赤彩されていたものと思われる。また坏部のプロポーションにやや歪みが見られる。22は外面及び坏部内面に赤彩が見られる。

・鉄剣（第12図）

切っ先の一部を欠損するが、ほぼ完形である。全長70.8cm（復元値）、刃部長57.2cm（復元値）、茎部長13.6cm、関付近における刃部の幅は3.6cmである。ナデ関で、刃部に鏽はない。茎部に目釘孔が2ヶ所確認でき、関近くにも1ヶ所存在すると思われるが、鏽が厚く、確認できない。

・玉類（第12図）

滑石製の白玉である。多くは、紐等で繋いだ時の形状を考慮してか片面に角度がつけてある。外面には右上 ⇔ 左下方向の研磨時の擦痕が見える。

S T17（下北方地下式横穴第17号）（第13図）

南調査区において検出された、1号墳周溝の外に構築された平入り型の地下式横穴墓である。玄室を1号墳墳丘とは反対側に向ける。義門と玄室天井の一部が崩落しており、玄室内は完全に埋まっていた。竪坑の一部を近世溝S E 2に切られる。竪坑から玄室奥壁までの軸長は3.15m（推定復元）である。

竪坑平面は隅丸の正方形に近い形状をなし、上端は一辺1.6m前後、底面は1.3m前後である。横断形状は台形状である。中ほどにおいて最大20cmほどの落差を持つ段が設けられ、義門より平坦になって玄室内へと続く。

義門は崩落により全形は不明であるが、壁面の立ち上がりは台形状である。義門の手前中央には、閉塞の押さえに杭状のものを建てたと見え、径40cmほどのピットが設けられている。

玄室は義道との境が明確ではなく、義門から緩やかに開きながら玄室奥壁に至る平面袋状の形状をなしている。ただし、玄室内には義門から50cmほどまで、竪坑から続くシラス土による貼り床があり、竪坑底面の段から、玄室内の貼り床の範囲までが義道を意味すると考えられる。玄室横断形状は、壁面が内湾しながら立ち上がり、穹隆状の天井へと至る。床面から天井までの高さは最高で0.7m弱である。また玄室右端の床面には朱のまかれた痕があり、埋葬頭位を示すものと思われる。

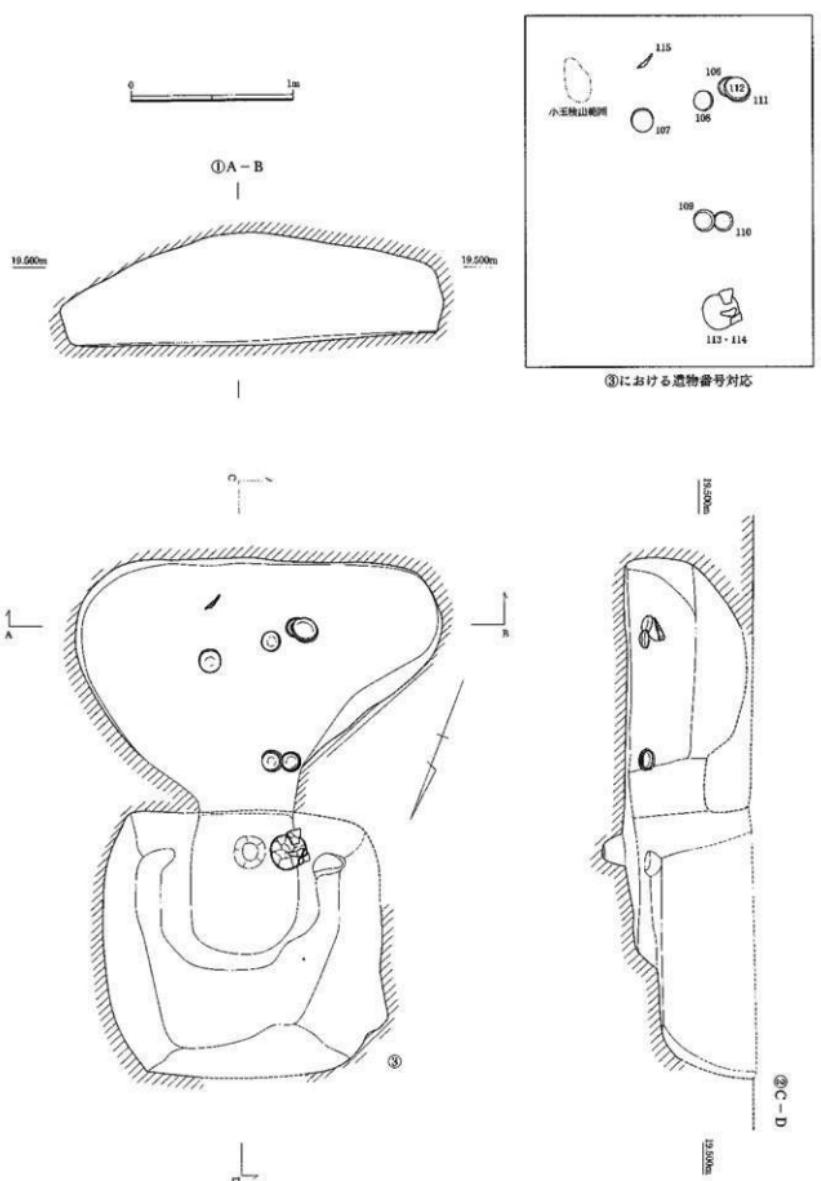
【出土遺物】

遺物は豊富で、その位置も明確な編重がない。土師器甕113・114は竪坑床面の義門側に、須恵器壺109、110は玄室義道側、須恵器壺107は玄室ほぼ中央、刀子115は玄室中央奥壁側、土師器壺111・112と須恵器壺106は玄室右側の奥でそれぞれ出土した。また玄室左端では径1.5mm（孔径0.5mm）、エメラルドグリーンの発色をする200点のガラス製小玉と刀子が検出された。

・須恵器（第14図）

T K 47型式の壺蓋3点、壺身2点が出土した。法量から、蓋106と身109はセット関係である。胎土における径4mm以下の小石の混入が顕著である。

106～108は蓋である。106は内面に赤彩が施される。外面にも微量に赤色顔料が付着するが、赤彩という程のものではない。口縁部の一部が欠損するが、その割れ口断面にも赤色顔料が付着する。107は外面全体及び内面の一部に赤色顔料が付着する。口縁端部、及び端部における数箇所の欠損部分にも赤色顔料が付着する。108は天井部がややへこみ、歪みが生じている。内外面に赤色顔料が付着するが、特に口縁部内面に顕著である。



第13図 ST17実測図 (Scale : 1/30)

109・110は身である。109は内外面に赤色顔料が付着するが、特にたちあがり部外面において、幅5cm程の範囲にわたり顕著である。セット関係である蓋106の口縁部内面にも同様の範囲で赤色顔料の顕著な部位があり、これに対応するものと思われる。110は底部外面において、幅0.5mm弱の極めて細い沈線でⅢの字状の線刻が施される。たちあがり部内面に赤色顔料が顕著に付着する。また外面の一部にも赤色顔料が付着する。

・土師器（第14図）

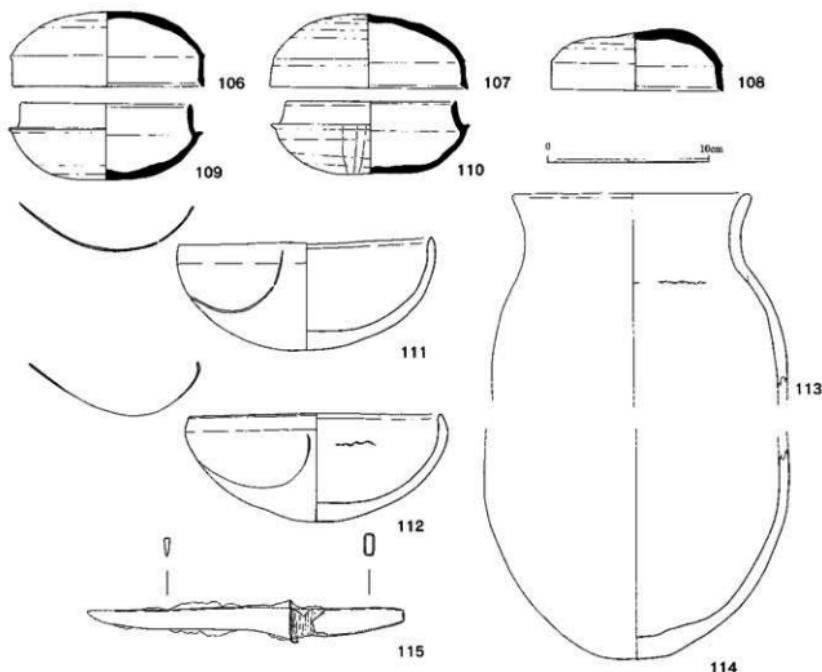
坏2点、甌2点が出土した。

坏111と112は形状、調整、法量が共通し、外面に幅約2mmのU字状の線刻が、刀子状の工具により施されることも同じである。またともに外面底面近くに赤色顔料が微量に付着する。

113、114は同一個体と思われる中型の長胴甌である。胎土中に径3mm以下の砂粒が多量に混入し、外面胴部下半には煤が付着する。

・刀子（第14図）

全長13.1cm（復元値）、関近くにおける刃部幅1.1cmと小型である。刃部長8.4cm（復元値）、



第14図 ST17出土遺物 (Scale : 1/3)

柄部長4.7cmである。刃部は緩やかに湾曲しながら関に向かって身幅を増す。銹着が激しく、関の形状は不明である。柄部は断面長方形の中空で、関には責金具が、関付近には表装が残る。茎部の形状は不明である。

S T 18 (下北方地下式横穴第18号) (第16図)

南調査区において、現代の大溝底面において検出された平入り型の地下式横穴墓である。1号墳の周溝外に位置するが、玄室は1号墳墳丘に向かう方向に構築されている。堅坑から玄室奥壁までの軸長は推定で3.4mである。

堅坑の平面形は、底面長軸約1.6m、短軸約1.1mとやや横に長い長方形である。左壁における深さは残存で約1.0m、横断形状は台形状である。縦断形状では外側の立ち上がり角度は横断形状における壁面の立ち上がりとほぼ同じであるが、内側においては垂直に近く立ち上がる。左壁には床面から約5cmの高さにおいて、羨門閉塞用の板をはめ込むためのものと思われる15cmほどの奥行きを持つくぼみが設けられている。床面はほぼ平坦であるが、中央においては、羨門に向かってゆるやかに下り、最大で10cmほどの落差が付くスロープ状になっている。この幅約70cmのスロープは、羨道部分においては平坦になってそのまま玄室内に入り、若干の傾斜を持って立ち上がる。

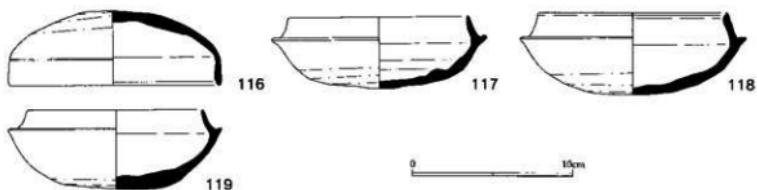
羨門、羨道部分は上部の大半を削平されており、形状は不明であるが、底面は平坦で、残存する壁面も平滑に仕上げられている。羨道底面幅約70cm、長約70cmである。須恵器壙蓋1点、身3点が出土している。

玄室は底面長軸約2.5m、短軸約1.0mの横に長い長方形である。底面近くまでのほとんどを削平されているが、高さ20cmほどが残る左壁では、底面から内湾しながら立ち上がる横断形状をなしている。縦断形状においても同じく内湾しながら立ち上がる。例えればかまぼこ形の玄室形状である。

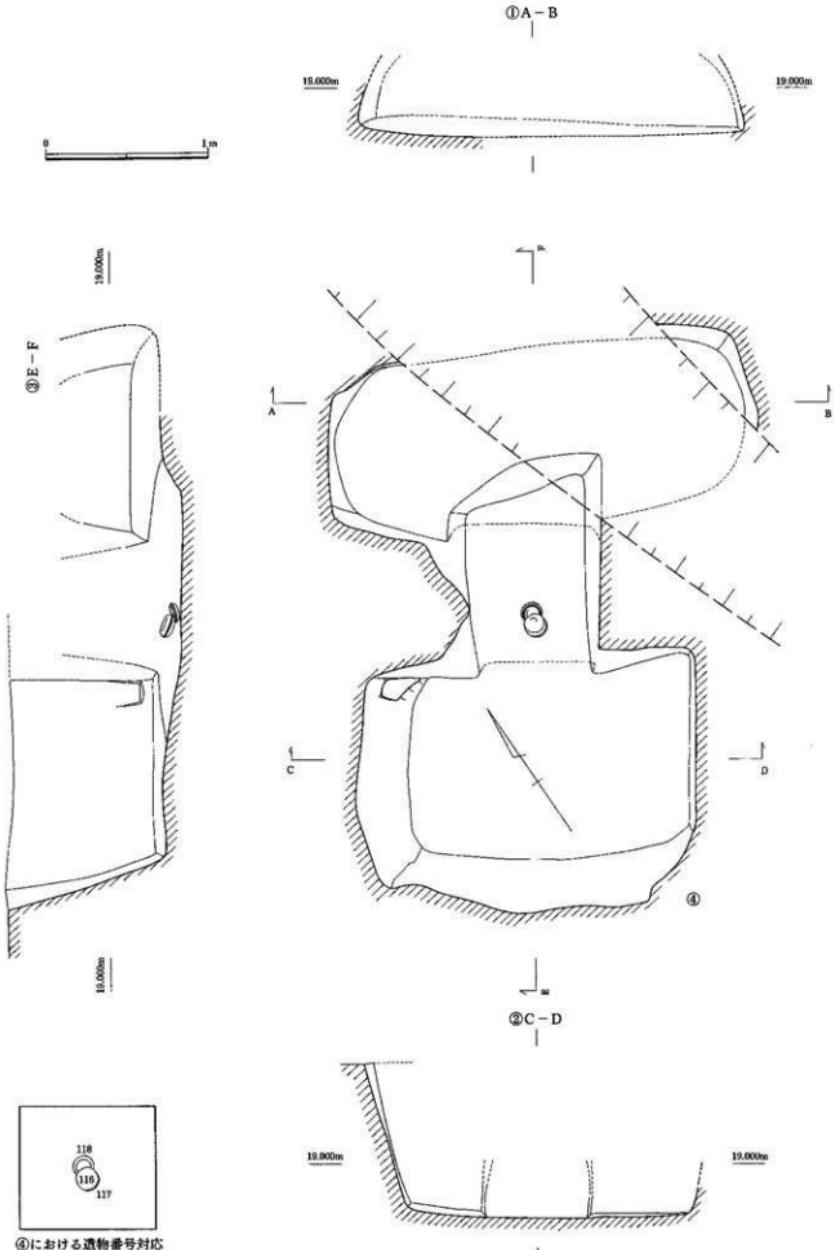
【出土遺物】

・須恵器 (第15図)

羨道部分において、T K 10型式の壙蓋1点、壙身3点が出土した。うち蓋116と身119はセット状態で出土し、また、その下に身118があったことから、本来、この3点は重ねて置かれていた。



第15図 ST18出土遺物 (Scale : 1/3)



第16図 ST18実測図 (Scale : 1/30)

たと考えられる。瓦質にも似た白味がかった色調と、各所の端部がやや丸味を帯びていることが通有の特徴である。

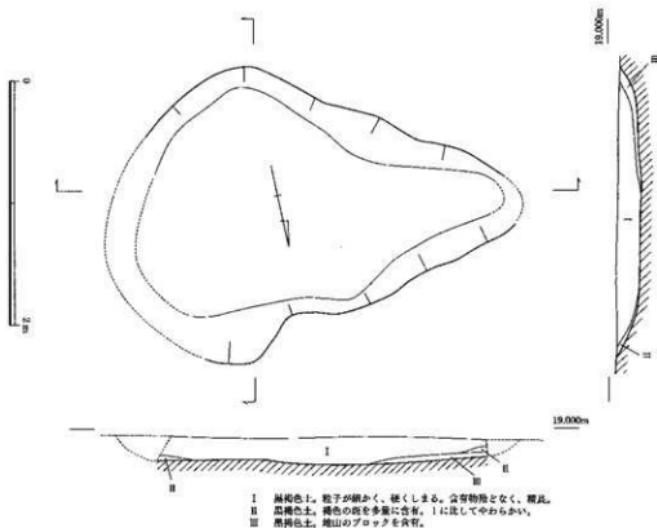
蓋116は内面の一部に赤色顔料が付着する。117～119は身である。117は内面に微量に赤色顔料が付着する。118は外面及び内面のごく一部に赤色顔料が付着する。119は内外面に赤色顔料が付着する。

c. 土坑 (S D)

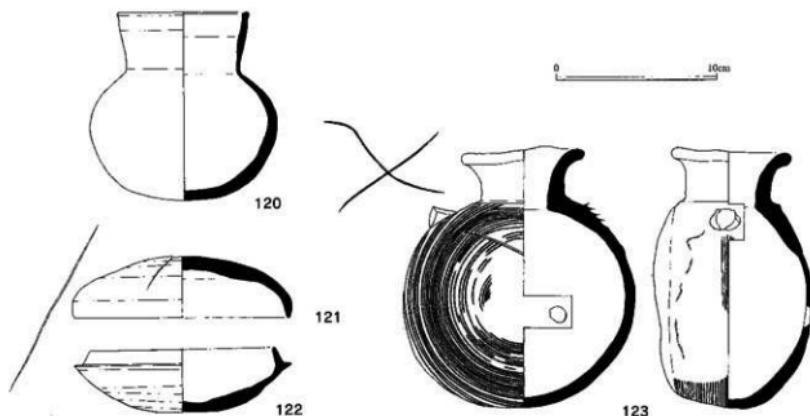
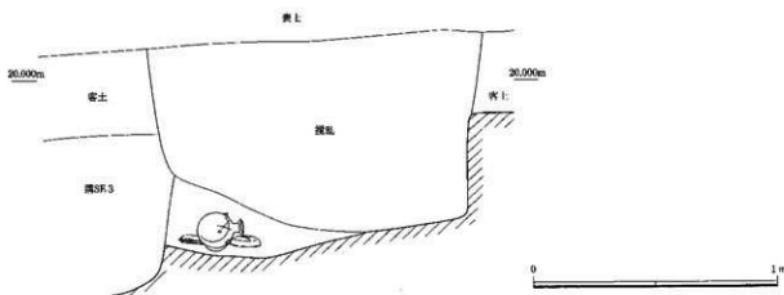
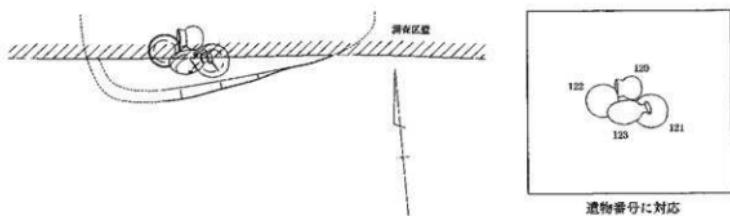
S D 2 (2号土坑) (第17図)

周溝底面に構築された平面不整形、断面すり鉢状の土坑である。溝S E 1に東端を切られるため、全形は不明であるが、上端長軸3.0m以上、短軸2.5m、深さは最大で0.23mである。周溝最下層VI層を堆積土としており、転落した葺石、埴輪片が含有される。

この土坑の構築や使用に伴う遺物の出土がないため、性格等は不明であるが、周溝最下層を堆積土としていることから、古墳構築に伴い、造られたものである可能性が高い。



第17図 SD2実測図 (Scale : 1/40)



第18図 SD5実測図 (Scale : 1/20) 及び出土遺物 (Scale : 1/3)

S D 5 (5号土坑) (第18図)

北調査区の南端および南調査区の北端において、それぞれ一部が検出された土坑である。遺構の中央は調査対象範囲外にあるため、未検出である。くわえて、北調査区では遺構の東半を後述の古代住居 S D 3 に、南調査区では上部の大半を重機によると思われる攪乱によって破壊されており、全形は不明である。残存する壁面の形状、および出土遺物の構成から、周溝外側の立ち上がり部分に構築された地下式横穴墓の可能性が高い。

北調査区の南端で検出した竪坑左壁は、ほぼ垂直に近い立ち上がりを持ち、底面は周溝底面とほぼ同じレベルである。竪坑の深さは50cmほどが残存しているが、前述のとおり、周溝全体が数回にわたる後代の整地を受けているため、本来はそれ以上の深さを持つ掘り込みであった可能性がある。また、本遺構構築時は周溝堆積土V層がすでに堆積していた（ないし堆積途中であった）はずであるが、V層上面における検出はできなかった。南調査区北端で検出した玄室部分は、先述のとおり上部を攪乱で失っており、残存部分は最深で約30cm、平面で20cm程度、玄室奥壁の部分であると思われる。奥壁に接するような状態で須恵器が出土している。

【出土遺物】

・須恵器 (第18図)

T K209型式の坏蓋、坏身、短口縁壺、提瓶が各1点ずつ出土した。法量より、坏蓋121と坏身122はセット関係と思われる。

坏蓋121は外面に幅約1.5mの沈線で一文字の線刻が施される。胎土中における径2mm以下の白色砂粒の混入が目立つ。

提瓶123は鍵状把っ手が双方とも欠損するが、それ以外は完形である。体部外面に幅約1mmでX字状の線刻が施され、体部中ほどには焼成後に径1cmほどの穿孔が施されている。

第3節 歴史時代の遺構と遺物

a. 土坑

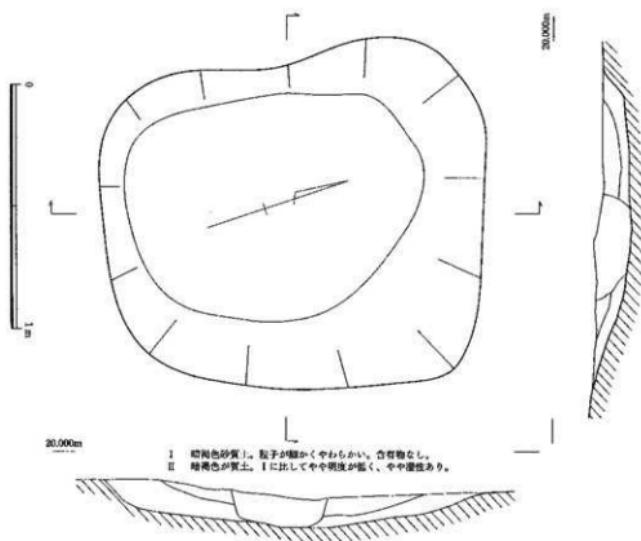
S D 3 (3号土坑)

北調査区の南西端において、セクションのみで検出した遺構である。周溝堆積土IV層直下に構築されており、平坦な底面、30cm程の高さで垂直に近く立ち上がる壁面を持つ。掘り込みの底面を周溝底面と同じくし、その上に10cmほどの厚さで粘土を入れ、硬化面を形成している。

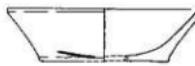
周溝堆積土IV層との関係、および後述の須恵器椀126が近接して出土したことから、古代の竪穴住居と思われる。

S D 4 (4号土坑) (第20図)

やや不整形な隅丸方形プランの土坑である。上端長軸3.1m、短軸2.5m、深さは最深で25cm、遺構のほぼ中央に攪乱土坑が入っている。断面形状は、一部で立ち上がりが明確ではあるものの、すり鉢状である。系切底の土師器坏片が出土したもの、底面において柱穴等もなく、性格は不



第19図 SD4実測図 (Scale : 1/40)



124

第20図 SD4出土遺物 (Scale : 1/3)

明である。

【出土遺物】

- ・土師器（第20図）

124は堆積土中より出土した糸切底の土師器坏である。底部と体部の境において何らかの工具のあたった痕であろうか、沈線状の刻線が入っている。体部形態より15世紀代の所産である。

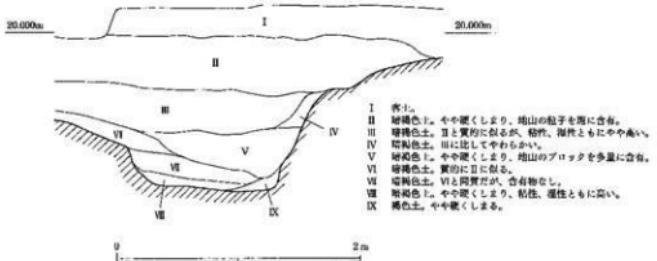
b. 溝状遺構

S E 1 (1号溝状遺構) (第21図)

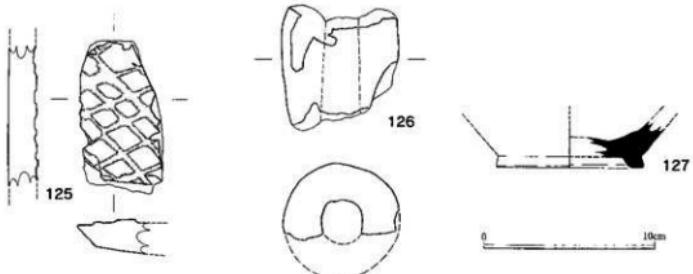
北調査区の東半において、周溝を縦断する形で構築されている断面台形状の、方形に巡る溝である。周溝堆積土IV層の下、地下式横穴第16号 (S T16) 堆積土の上に構築されており、古代のものと考えられる。底面が東に向かって緩やかに下る構造であり、この傾斜が霧島・高原スコリア降灰直前時の削平ライン (第6図のラインB) と共にすることから、この削平と同時期の構築物である可能性が高い。上端幅は最大で1.2m、最小で0.5m (周溝部分においては、当遺構の構築面ではなく、周溝底面での検出になってしまったため、計測値では除く) である。なお前述のとおり、地下式横穴第16号の玄室天井の崩落は当遺構の構築を契機として起こり、同時に、おそらくは溝を掘り上げた時に出た廃土 (周溝堆積土) をもって、玄室の「埋め戻し」、及びこの部分における溝の再構築を行ったものと考えられる。

S E 2 (2号溝状遺構)

調査区を南北に縦断する溝である。調査区北東端において S E 1 と接して平行に西に流れ、ほぼ直角に曲がるコーナーを経て南に流れを変える。染付などの陶磁器類の他、金属製の簪やキセルの雁首等が出土している。



第21図 SE1セクション図 (Scale : 1/40)



第22図 遺構外出土遺物 (Scale : 1/3)

S E 3 (3号溝状遺構)

南調査区の西半において検出した南北に流れる大型の溝である。幅約3m、深さ1.5mもあり、S T18はこの溝によりその大部分を削平されていた。近世の陶磁器類を初め、近代、現代のものが多数出土したが、下層出土はほぼ近世の遺物に限られたため、近世からごく最近まで使用されていた溝と考えられる。

e. 遺構外出土の遺物（第22図）

125は古代瓦片である。凸面は斜格子叩きの平瓦で、福岡県鴻臚館跡における叩目文様分類の3Ab類にあたる（池崎編 2002）。凹面は丁寧なナデびより布目を擦り消し、側面には分割の際のケズリ痕が残る。叩目文様や側面の角度より、太宰府においては8世紀末以降に盛行する円筒桶製と考えられる（栗原 2000）。126は大型の土錐、127は9世紀代の須恵器椀高台部片である。

【参考文献】

- 池崎譲二編 2002 「鴻臚館跡12」福岡市埋蔵文化財調査報告書第733集 福岡市教育委員会
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
栗原和彦 2000 「太宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館 研究論集』25 九州歴史資料館
田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡一国道24号線横原バイパス建設に伴う遺跡調査報告』(II) 奈良県立橿原考古学研究所

表3 遺物觀察表①（土器）

番号	種別	器種	部位	出土場所		法量(寺)		はく離様		調整		色調		胎土	備考	注記号	
				遺構	層位・位置	口径	測定	底径	高さ	外側	内面	外面	内面				
1	土師器	高环	完形	周溝	V層	14.8		13.6	12.5	+ナ	+ナ	茶色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
2	土師器	浅鉢	完形	周溝	VI層	12.1		10.7	10.7	+ナ	+ナ	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
3	埴輪	門形埴輪	口輪部	S-17	玄室床裏土	(後)				ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
4	埴輪	円筒埴輪	脇部	ITE-101	玄室脚上	(後)				ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
5	埴輪	円筒埴輪	脇部	S-17	玄室床裏土	(後)				ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
6	埴輪	円筒埴輪	脇部	周溝					6.8		ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1
7	埴輪	円筒埴輪	脇部	周溝					6.8		ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1
8	埴輪	円筒埴輪	底部	北地区	表探				5.5		ナナメアラベスク(1cm)	ナ	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1
9	埴輪	円筒埴輪	底部	周溝	V層				5.5		ナナメアラベスク(1cm)	+ナ	にい・褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1
10	埴輪	円筒埴輪	底部	擾乱					5.5		ナナメアラベスク(1cm)	ナ	赤褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1
11	埴輪	形象埴輪	周溝	V層					5.5		ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月	吉主五郎作	SEK15007M1
12	埴輪	形象埴輪	周溝						5.5		ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1
13	土師器	甕	完形	S-16	玄室床面	16.6	京		12.5	+ナ	+ナ	にい・褐色	にい・褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
14	土師器	小型甕	完形	S-16	玄室床面	7.3			7.3	+ナ	+ナ	にい・褐色	灰褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
15	土師器	小型甕	完形	S-16	玄室床面	11.8			11.8	+ナ	+ナ	白粉褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
16	土師器	浅鉢	完形	S-16	玄室床面	12.5			12.5	+ナ	+ナ	にい・褐色	灰褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
17	土師器	甕	完形	S-16	玄室床面	18.4			12	1.8	1.8	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
18	土師器	高环	完形	S-16	玄室床面	19.3			16.2	1.8	1.8	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
19	土師器	高环	完形	S-16	玄室床面	17.0			13.3	1.8	1.8	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
20	土師器	高环	完形	S-16	玄室床面	15.5			11.9	1.8	1.8	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
21	土師器	高环	完形	S-16	玄室床面	18.4			11.5	1.7	1.8	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
22	土師器	高环	完形	S-16	玄室床面	18.3			11.3	1.8	1.8	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
106	須恵器	壺蓋	完形	S-17	玄室床面	12.7			5.0	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
107	須恵器	壺蓋	完形	S-17	玄室床面	13.3			5.1	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
108	須恵器	壺蓋	完形	S-17	玄室床面	11.4			3.8	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
109	須恵器	壺身	完形	S-17	玄室床面	11.4			5.1	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
110	須恵器	壺身	完形	S-17	玄室床面	16.6			4.5	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
111	土師器	甕	完形	S-17	玄室床面	15.7			7.8	+ナ	+ナ	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
112	土師器	甕	完形	S-17	玄室床面	15.5			7.1	+ナ	+ナ	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
113	土師器	甕	堅坑	S-17	堅坑	14.6			7.8	+ナ	+ナ	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
114	土師器	甕	堅坑	S-17	堅坑	9.6			4.6	+ナ	+ナ	褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
116	須恵器	壺蓋	完形	S-18	築造床面	14.1			7.8	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
117	須恵器	壺身	完形	S-18	築造床面	12.0			6.5	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
118	須恵器	壺身	完形	S-18	築造床面	11.5			6.5	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
119	須恵器	壺身	完形	S-18	築造床面	11.7			6.5	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
120	須恵器	壺身	完形	S-18	築造床面	11.5			6.5	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
121	須恵器	壺身	完形	S-18	築造床面	11.3			6.5	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
122	須恵器	壺身	完形	S-18	築造床面	11.4			6.5	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
123	須恵器	提板	完形	S-18	築造床面	7.2			6.2	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
124	土師器	甕	堅坑	S-18	築造床面	11.3			7.8	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		にい・褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
125		瓦								7.8	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1
126	土雞		遺構外							長7.4・幅7.0・乳孔2.4		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	
127	須恵器	楕	底部						9.2	ナナメアラベスク(1cm)ナナメアラベスク(1cm)		褐色	褐色	田中1962年2月		SEK15007M1	

表4 遺物観察表④(鉄器)

番号	種別	出土場所		法量(cm)				備考
		遺構	位置	全長	刃部長	基部長	身幅	
23	鉄剣	ST16	玄室床面	70.8	57.2	13.6	3.6	ナデ間 刃部に解なし 目釘孔は3ヶ所と思われる
115	刀子	ST17	玄室床面	13.1	8.4	4.7	1.1	開部に賣金具が残る 開形状、茎形状不明

表5 遺物観察表⑤(玉類)

番号	種別	出土場所					法量(mm・g)					石材							
		遺構	位置	最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	石材	遺構	位置	最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量			
24	白玉	ST16	玄室床面	3.6	4.2	4.3	1.6	0.07	滑石	65	白玉	ST16	玄室床面	3.5	4.0	4.1	1.8	0.06	滑石
25	白玉	ST16	玄室床面	3.5	4.3	4.4	1.7	0.08	滑石	66	白玉	ST16	玄室床面	1.8	4.8	4.9	2.2	0.04	滑石
26	白玉	ST16	玄室床面	3.5	4.4	4.1	1.8	0.09	滑石	67	白玉	ST16	玄室床面	2.8	4.1	4.2	2.1	0.07	滑石
27	白玉	ST16	玄室床面	4.1	4.3	4.1	1.9	0.09	滑石	68	白玉	ST16	玄室床面	2.7	4.5	4.2	2.1	0.07	滑石
28	白玉	ST16	玄室床面	3.2	4.2	4.5	1.7	0.09	滑石	69	白玉	ST16	玄室床面	2.0	4.1	3.9	1.8	0.05	滑石
29	白玉	ST16	玄室床面	3.7	4.2	4.2	1.8	0.09	滑石	70	白玉	ST16	玄室床面	2.8	4.1	4.1	2.0	0.06	滑石
30	白玉	ST16	玄室床面	3.5	4.2	4.2	1.9	0.06	滑石	71	白玉	ST16	玄室床面	2.9	4.1	4.2	2.0	0.06	滑石
31	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.2	4.1	1.6	0.05	滑石	72	白玉	ST16	玄室床面	2.9	3.9	4.0	2.0	0.06	滑石
32	白玉	ST16	玄室床面	3.1	4.4	4.4	1.7	0.05	滑石	73	白玉	ST16	玄室床面	2.9	4.2	4.2	2.0	0.05	滑石
33	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.4	4.4	1.7	0.05	滑石	74	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.1	4.1	2.0	0.08	滑石
34	白玉	ST16	玄室床面	3.2	4.1	4.2	1.7	0.06	滑石	75	白玉	ST16	玄室床面	2.9	3.9	4.0	2.0	0.06	滑石
35	白玉	ST16	玄室床面	3.2	4.0	4.0	1.8	0.05	滑石	76	白玉	ST16	玄室床面	3.2	3.9	4.0	1.8	0.06	滑石
36	白玉	ST16	玄室床面	3.2	4.1	4.2	1.8	0.05	滑石	77	白玉	ST16	玄室床面	2.1	4.0	4.1	1.8	0.05	滑石
37	白玉	ST16	玄室床面	2.3	4.2	4.2	1.6	0.04	滑石	78	白玉	ST16	玄室床面	2.0	4.0	4.0	1.9	0.04	滑石
38	白玉	ST16	玄室床面	1.8	4.1	4.1	1.6	0.03	滑石	79	白玉	ST16	玄室床面	2.9	4.0	4.0	1.5	0.07	滑石
39	白玉	ST16	玄室床面	3.1	4.0	4.0	1.5	0.08	滑石	80	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.1	4.0	1.7	0.07	滑石
40	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.0	4.0	1.5	0.07	滑石	81	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.1	4.0	1.5	0.07	滑石
41	白玉	ST16	玄室床面	2.5	4.0	4.0	1.5	0.07	滑石	82	白玉	ST16	玄室床面	1.5	4.0	4.0	1.5	0.03	滑石
42	白玉	ST16	玄室床面	2.9	4.0	4.0	1.5	0.07	滑石	83	白玉	ST16	玄室床面	2.5	4.0	4.0	1.5	0.06	滑石
43	白玉	ST16	玄室床面	2.0	4.0	4.0	1.5	0.04	滑石	84	白玉	ST16	玄室床面	2.1	4.0	4.0	1.5	0.05	滑石
44	白玉	ST16	玄室床面	2.9	4.0	4.0	1.5	0.06	滑石	85	白玉	ST16	玄室床面	2.0	4.0	4.1	1.7	0.05	滑石
45	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.0	4.1	1.5	0.07	滑石	86	白玉	ST16	玄室床面	2.0	3.9	4.0	1.5	0.05	滑石
46	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.0	4.0	1.5	0.08	滑石	87	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.0	4.0	1.7	0.05	滑石
47	白玉	ST16	玄室床面	2.4	4.0	4.1	1.5	0.06	滑石	88	白玉	ST16	玄室床面	2.0	4.0	3.9	1.5	0.04	滑石
48	白玉	ST16	玄室床面	2.7	4.0	4.0	1.7	0.05	滑石	89	白玉	ST16	玄室床面	3.1	4.0	4.1	1.6	0.07	滑石
49	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.0	4.0	1.5	0.07	滑石	90	白玉	ST16	玄室床面	2.1	4.0	4.1	1.7	0.05	滑石
50	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.0	4.0	1.7	0.06	滑石	91	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.0	4.1	1.8	0.06	滑石
51	白玉	ST16	玄室床面	1.8	4.0	4.1	1.7	0.05	滑石	92	白玉	ST16	玄室床面	2.0	4.0	4.0	1.5	0.05	滑石
52	白玉	ST16	玄室床面	2.5	4.0	4.0	1.7	0.08	滑石	93	白玉	ST16	玄室床面	2.0	4.0	4.0	1.5	0.04	滑石
53	白玉	ST16	玄室床面	2.0	3.9	4.0	1.6	0.06	滑石	94	白玉	ST16	玄室床面	2.1	3.9	3.9	1.5	0.06	滑石
54	白玉	ST16	玄室床面	1.3	3.8	4.0	1.5	0.04	滑石	95	白玉	ST16	玄室床面	2.5	4.0	4.0	1.7	0.06	滑石
55	白玉	ST16	玄室床面	2.0	4.0	4.0	1.7	0.04	滑石	96	白玉	ST16	玄室床面	2.1	4.0	4.1	1.5	0.06	滑石
56	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.1	4.0	1.6	0.07	滑石	97	白玉	ST16	玄室床面	細片のため未実測	未計測	0.03	滑石		
57	白玉	ST16	玄室床面	2.5	4.0	4.0	1.5	0.05	滑石	98	白玉	ST16	玄室床面	2.8	4.0	4.0	1.7	0.06	滑石
58	白玉	ST16	玄室床面	1.9	4.0	4.1	1.5	0.06	滑石	99	白玉	ST16	玄室床面	3.2	4.0	4.0	1.5	0.08	滑石
59	白玉	ST16	玄室床面	4.0	4.0	4.5	2.0	0.08	滑石	100	白玉	ST16	玄室床面	3.2	4.1	4.1	1.9	0.07	滑石
60	白玉	ST16	玄室床面	2.7	4.3	4.1	2.1	0.06	滑石	101	白玉	ST16	玄室床面	3.2	4.0	4.1	1.7	0.09	滑石
61	白玉	ST16	玄室床面	3.8	4.1	4.1	2.0	0.09	滑石	102	白玉	ST16	玄室床面	3.1	4.0	4.0	1.7	0.07	滑石
62	白玉	ST16	玄室床面	3.0	4.0	4.1	1.7	0.06	滑石	103	白玉	ST16	玄室床面	2.4	4.0	4.0	1.6	0.05	滑石
63	白玉	ST16	玄室床面	3.1	4.8	4.5	2.0	0.07	滑石	104	白玉	ST16	玄室床面	細片のため未実測	未計測	0.02	滑石		
64	白玉	ST16	玄室床面	2.8	4.4	4.2	2.0	0.06	滑石	105	白玉	ST16	玄室床面	細片のため未実測	未計測	0.01	滑石		

第IV章 考 察

第1節 下北方の埴輪

a. 下北方1号墳の埴輪

下北方1号墳では、従前より埴輪の表探資料は知られてきたが、いずれも細片であり、その様相は不明であった。しかし今回の発掘調査により、1号墳の周溝や、地下式横穴墓内の崩落土中より一定の資料が得られ、川西編年IV期前半に比定されることが判明するとともに、その全形を復原することが可能となった。

突帯1条と突帯設定技法による沈線が残る資料から、突帯間間隔は13.5cm前後、反転復原により胴部径は35cm前後である。透かし孔の部分が残る資料は2個体あり、正円に近く復原すれば、径5cmで、胴部径、突帯間間隔に比して小振りである。段構成は、出土した資料からは復原できないため、周辺資料から類推するしかないが、同一古墳群内において、後出する13号墳の円筒埴輪は、4条5段構成である。一般に円筒埴輪は、時間の推移とともに段数が減少する傾向にあり、これに沿えば、13号墳に先行する1号墳の段構成は5段以上である可能性が高い。但し、1号墳の資料は器厚1.0cm前後と、総じて器壁が薄く、堅緻に焼き上がってはいるものの、6段、7段の構成では自重に耐えうるものか、疑問である。従って13号墳と同じく、4条5段構成を考えるのが、最も妥当であろう。透かし孔の配置についても、出土した資料からは不明である。下北方1号墳と同じく4条5段構成の県内の資料のうち、透かし孔の配置が判明するものは同じ下北方古墳群中の下北方13号墳（川西編年V期）、西都市西都原古墳群の女狭穂塚古墳（〃III期）、同三納古墳群の松本塚古墳（〃IV期後半）、新富町祇園原古墳群の新田原62号墳（〃V期）があり、女狭穂塚古墳を除いて、いずれも透かし孔は一段につき2方向、2段目と4段目ににおいて、隔段直交方向に配置される。下北方1号墳と同一時期のものはないが、前後する時期のものがいずれも隔段配置であることから、下北方1号墳の透かし孔も、隔段直交配置である可能性が高い。

以上より復原した下北方1号墳の円筒埴輪が第23図左である。器高約70cm、突帯4条5段構成で、底部から口縁部までほぼ垂直に近く立ち上がる。胴部径が35cm前後と非常に大きく、ために、全体のプロポーションとしては横に大きな、重量感のある印象となる。しかし器壁は1.0cm前後と薄手で、断面台形状の突帯は突出度が高い。隔段直交方向に配置された円形の透かし孔は径5cmと小振りで、細部の作りはシャープと言える。外面調整は1次調整タテハケのみ、内面調整は上部ハケ、下部はナデによる。焼成は堅緻で、器面に黒斑はない。

b. 下北方古墳群の埴輪

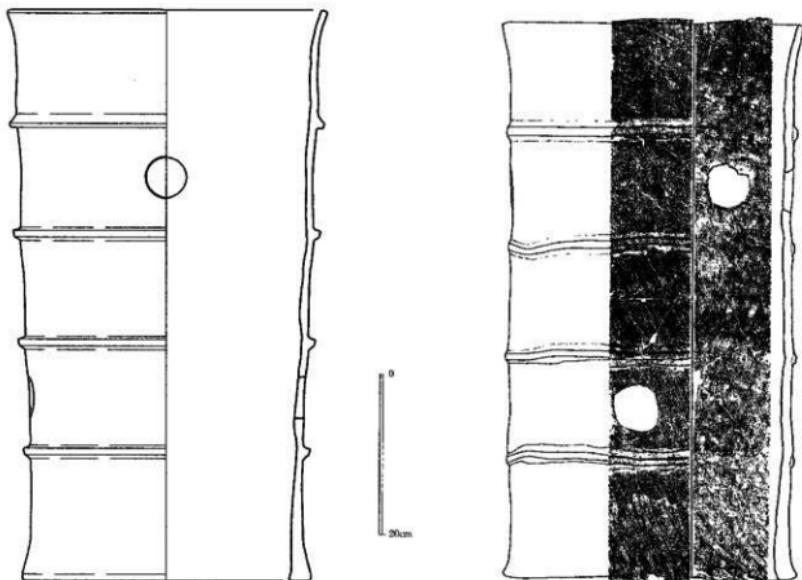
下北方古墳群では、前方後円墳の1号墳、3号墳、13号墳で発掘調査により円筒埴輪が出土している。13号墳は墳丘上、1号墳、3号墳は周溝内からの出土である。他にこれら前方後円墳に隣接する円墳の5号墳（3号墳北隣接）、12号墳（1号墳西隣接）、14号墳（13号墳西隣接）の

周溝からも埴輪が出土しているが、いずれも細片の少景出土に留まり、またそれぞれに隣接する前方後円墳の埴輪と類似することから、流れ込みの可能性が高い。

13号墳の円筒埴輪は、径の違いより大型、中型、小型の3種に大別され、うち、全形のわかる大型のものは、器高約69cmで底部から口縁部までほぼ垂直に立ち上がる。突帯4条5段構成で、胴部径約35cm、胴部突帯間隔14~15cmと大型であるが、器壁は1.1cm前後と薄手である。透かし孔は径5~6cmと小振りで、隔段直交に配置される。突帯は突出度の低い断面台形状で、外面調整は1次調整タテハケのみである。また特徴的な要素として、自重によるゆがみを補正するためか、底部近くにタタキが施されている。川西編年V期前半に比定される。

3号墳の埴輪は細片しかなく、全形は復原できないが、1号墳、13号墳の埴輪と比較すると、調整の施し方や全体的な作りなどが1号墳よりやや粗雑化しているが、13号墳よりは丁寧に作られている印象を受ける。従って、1号墳と13号墳の間、川西編年IV期の後半に位置づけるのが妥当かと思われる。

川西編年IV期前半の1号墳と、V期前半の13号墳では時間的な隔たりがあり、後出の13号墳では外面調整の顕著な粗雑化や突帯の低平化、突帯設定技法の消失や底部近くのタタキ調整など、時間的推移を表出した変化や、新出の要素などが顕れている。しかしながら、底部から口縁部にかけてほぼ垂直に近く立ち上がるプロポーションや、大型の胴部径、小振りな透かし孔など、基本的な造形が共通している。細かくは胴部径や突帯間隔、透かし孔の径などの計測値も近似し、類似度は極めて高い。



第23図 下北方1号墳（左：想定復原）・13号墳（Scale: 1/6）

下北方13号墳と同時期、下北方古墳群の位置する宮崎平野の北部、一つ瀬川流域では祇園原古墳群が最盛期を迎へ、百足塚古墳をはじめ、水神塚古墳、機織塚古墳など埴輪採用墳が多数存在するが、形態的に13号墳の埴輪と類似するものはない。

3号墳の詳細が不明な現段階において断言することは難しいが、下北方古墳群では、累代的な、系譜を一にする埴輪生産が行われていた可能性が考えられる。ただし、その中でも13号墳では底部近くにおけるタタキという新出の技法を取り入れられており、古墳群内で保持された埴輪生産も、決して排他的なものではなかったことがわかる。

第2節 下北方の古代瓦

本遺跡では凸面斜格子目叩きの古代瓦片が出土している（第22図125）。わずか1点のみであり、遺構外出土ではあるものの、宮崎市域で確認されている古代瓦は多くはなく、極めて重要な資料である。

現在、宮崎市域では、一つ瀬川右岸域、海岸部の第2砂丘上、当遺跡の所在する下北方台地上の大きく3箇所において古代瓦が確認されている。

一つ瀬川右岸の下村窯跡群（佐土原町字東上那珂）は、8世紀後半から9世紀代を中心として操業された瓦陶兼窯である（木村編 1996、竹中編 2008）。凸面縦目叩きによる平瓦が多くを占め、斜格子叩きのものはない。同じ一つ瀬川右岸域では、隣接する西都市に国衙（寺崎遺跡）や国分寺があり、下村窯は直線距離10km程の位置にあるこれら官衙への供給源のひとつと推定されている。

一つ瀬川右岸から大淀川左岸まで、宮崎市の海岸部を南北に縱貫する第2砂丘の南端では、「櫛字石神（現山崎町字下ノ原周辺）」で古代瓦が出土すると記載されたものがあり（石川1968）、同じく第2砂丘南端の猿野遺跡で、凹凸両面に縦目叩きを施した平瓦片が1点出土している（鳥枝・久富編 1996）。

下北方台地上においては、本遺跡と下北方5号墳周辺遺跡（金丸編 2008）の発掘調査で古代瓦が出土しており、他に字塚原に所在する景清廟という廟堂周辺畠地での表採資料（長津編 1991）、及び同じく景清廟周辺において、1984年に水道工事の際に出土した資料（第24図）がある。今までに確認されているのは、平瓦28点、丸瓦1点で、軒瓦はない。全体に土師質のものが多く、須恵質にまで焼き上がっているものはない。一部、側面の角度より一枚作りの可能性が考えられるものもあるが、大方は円筒桶による桶巻き作りと思われる。側面の面取り加工や、凹面側縁近くの段など、側縁付近を二次的に調整するものが多い。凸面文様は一辺7mm前後の格子目叩き、13mm前後の斜格子叩き、及びナデ消しの3種で、縦目のものではなく、量的には格子目叩きのものが最も多い。

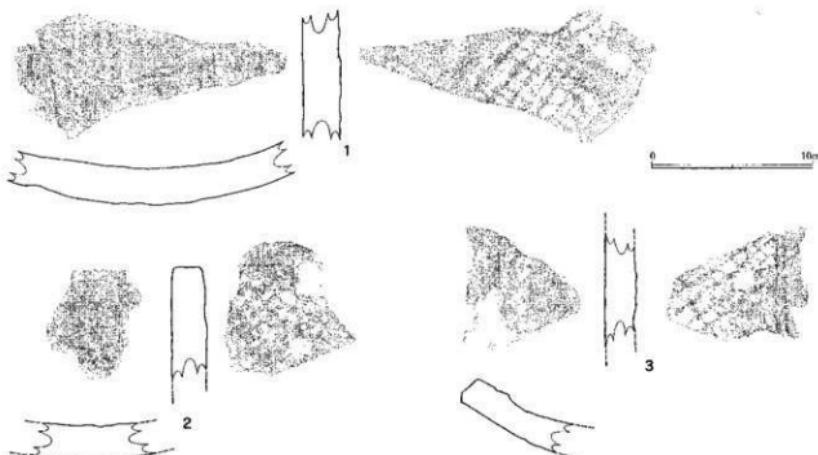
格子目叩きのうち、第24図1の凹面には粘土板の継ぎ目や、細沈線として残る分割突帯の痕が観察でき、また凹面の器面は模骨の痕が見られない平滑な弧を描くことから、円筒桶製である。また凹面の側縁近くに段を持つ3は、側面に2段の面が形成されているが、凸面側の面は製作台上における側面切り落としの際に、凹面側の面は側縁段整形時にそれぞれ形成された面と思われ

る。凹面側縁における段の内側側面には明瞭な布目痕が確認でき、この部分を含めた布口の残る面の曲率が一定ではないことから、桶巻き作りではなく、一枚作りの可能性がある。ただし先述の下村窯の製品中には、円筒桶から外した後、再度叩き調整を行い、結果として曲率が一定ではなくなっているものがあり、凹面の曲率のみをもって一枚作りと連断することはできない。

現在までのところ明確な遺構に伴って出土したものがなく、正確な時期比定は今のところ出来ない。ただし円筒桶製凹面斜格子の瓦は、大宰府においては8世紀末以降に盛行するとされており（栗原 2000）、下北方台地の瓦も、これ以降の所産ではある。また極めて薄弱な論拠ではあるが、瓦を出土した本遺跡と下北方5号墳周辺遺跡では、9世紀台の遺物（土師器、須恵器、陶磁器）が目に付き、10・11世紀台の遺物がない。これを援用すれば、下北方の瓦は9世紀台の所産である可能性が高いと言える。

現在、宮崎県内で確認されている瓦窯は先述の下村窯だけであるが、下村窯の製品は凹面縄目叩きを主とし、完全な須恵質で焼き上がるものが多く、下北方の瓦とは明らかに異なる。下北方の瓦は、台地から程遠くない窯場で作られたのであろうが、下村窯の瓦とは製作技法上の顕著な共通点も見当たらないことから、別系統の工人集団の存在が想定される。日向国衙や国分寺では凹面縄目だけではなく、格子目や斜格子叩きの瓦も散見されることから、下北方の瓦は、これら国府、国分寺における瓦制作の一部が導入されたものかと思われる。

では下北方における瓦製作導入の主体は何であろうか。下北方台地上における瓦の出土、採取地点は比較的広範囲におよび、複数の瓦葺建物の存在が考えられる。古代における瓦葺建物として想定されるのは官衙と寺院であるが、台地上には、古く、複数の寺院が存在していたと思しき跡がある。台地の南西端に建つ曹洞宗帝釈寺は、現在、台地上唯一の寺院であるが、推古朝開山



第24図 下北方町字塚原 景清廟前出土古代瓦 (Scale : 1/3)

との縁起を持つ。また瓦採取地点の一つである先述の景清廟は、平家の勇将藤原景清の墓を祀ったと伝えられる廟堂であるが、敷地内には複数の墓石があり、元が寺院であったことをうかがわせる。他に沙汰寺という寺のあったという言い伝えや、妙雲山長光寺という地名、寺ヶ迫という字名など、寺院に関する地名、口伝が多く、時代は明確でないものの、台地上には複数の寺院が存在していたかと思われる。

また石川恒太郎氏は、北に丘陵を背負い、南に大河と平野を望む、「天子南面」の地である当地の立地環境の良さや、「宮崎」という地名が、発祥以降、中世末に至ってもなお、当地周辺の地名として用いられていたことなどから、下北方に宮崎郡衙の存在を想定している（石川 1977）。台地上には、神武天皇の仮宮跡、平家の勇将藤原景清の寓居跡などの貴人伝説が残り、古く、権力者が居据していたことを連想させる。これに従い、これらの瓦は郡衙周辺寺院に葺かれていたと想定することも魅力的である。

【参考文献】

- 石川恒太郎 1968『宮崎県の考古学』吉川弘文館
石川恒太郎 1977「第1章 地形および歴史的環境」（野間重孝編『下北方地下式横穴第5号』宮崎市文化財調査報告書第3集 宮崎市教育委員会）
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第57号3
金丸武史編 2008『下北方5号墳周辺遺跡』宮崎市文化財調査報告書第68集 宮崎市教育委員会
木村明史編 1996『下村窯跡群報告書』（基礎資料編）佐土原町文化財調査報告書第10集 佐土原町教育委員会
栗原和彦 2000「大宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館 研究論集』25 九州歴史資料館
竹中克繁編 2008『下村窯跡群報告書II』（遺物編）宮崎市文化財調査報告書第72集 宮崎市教育委員会
島枝誠・久富なをみ編 1996『萩崎第2追跡・猿野遺跡』宮崎市文化財調査報告書第30集 宮崎市教育委員会

【挿図出典】

- 第23図中 下北方13号墳埴輪：永友良典・津隈久美子編 1990『埋蔵文化財調査研究報告』III 下北方古墳－遺物編－ 宮崎県総合博物館

写 真 図 版



左：地下式横穴第17号 中：地下式横穴第18号 右：5号土坑



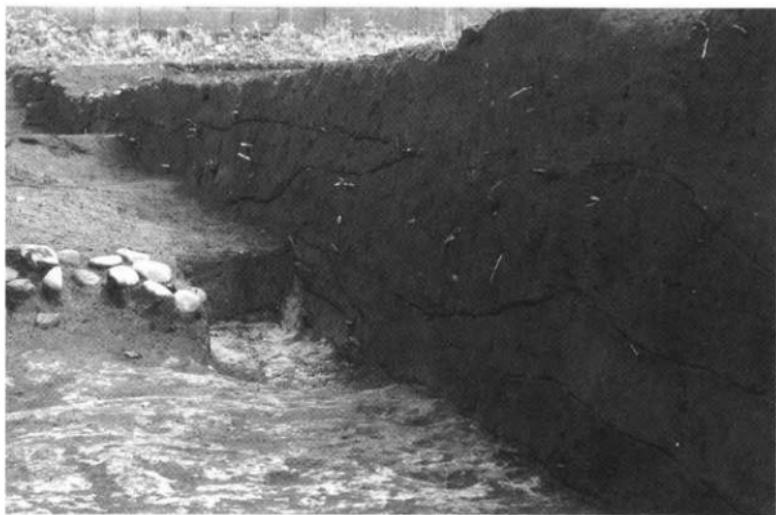
図版1 北調査区全体（南より）



図版2 北調査区全体（東北より）



図版3 南調査区全体（北より 左：ST17 右：ST18）



図版4 周溝西面セクション（南西より）



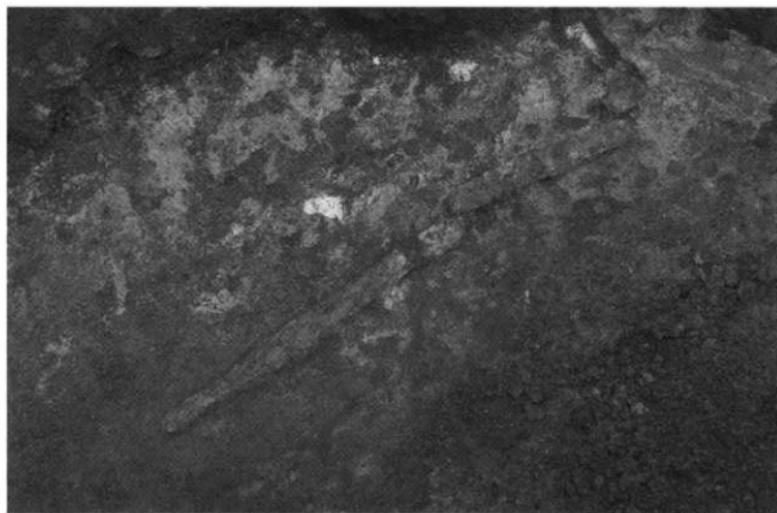
図版5 ST16 (南西より)



図版6 ST16 (北より 玄室奥側より)



図版7 ST16玄室遺物出土状況（北西より 第11図13・第12図23）



図版8 ST16玄室鉄剣出土状況（第12図23）



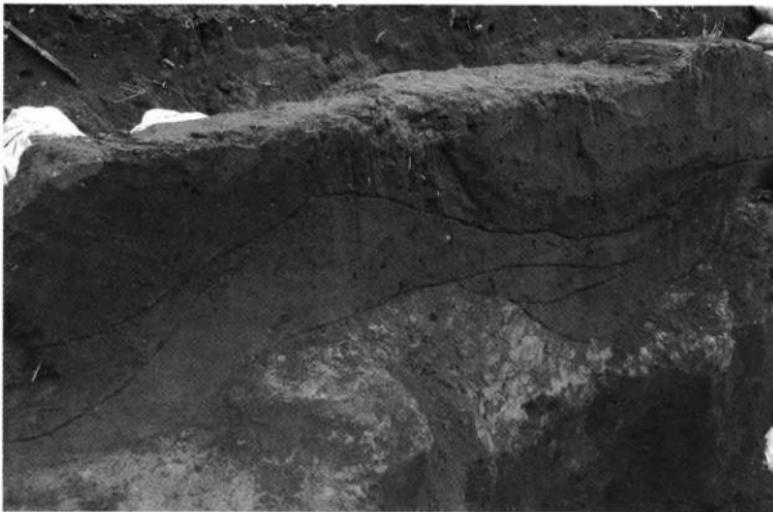
图版9 ST16玄室土器出土状况（第11图14~22）



图版10 ST16玄室白玉出土状况



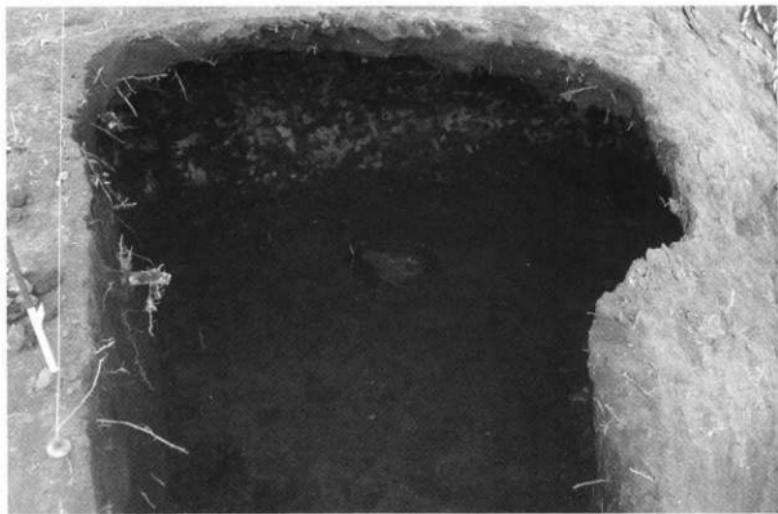
図版11 ST16竖坑半裁状況（南西より）



図版12 ST16玄室上堆積西面セクション（北西より）



図版13 ST17 (北西より 墓坑側より)



図版14 ST17玄室遺物出土状況



図版15 ST18 (北東より 手前：玄室 奥：堅坑)



図版16 SD2 (北西より)



図版17 SD5 (南西より)



図版18 SE2 (北より)



図版19 SE2北面セクション（北西より）



図版20 調査参加者



图版21 周溝出土土師器（第7图 1）



图版22 周溝出土円筒埴輪片（第8图 3）



图版23 周溝出土円筒埴輪片（第8图 4）



图版24 周溝出土円筒埴輪片（第8图 5）



图版25 周溝出土円筒埴輪片（第8图 6）



图版26 周溝出土円筒埴輪片（第8图 7）



图版27 周溝出土円筒埴輪片（第8图 8）



图版28 周溝出土円筒埴輪片（第9图 9）



图版29 周溝出土円筒埴輪片（第9図 10）



图版30 周溝出土形象埴輪片（第9図 11）



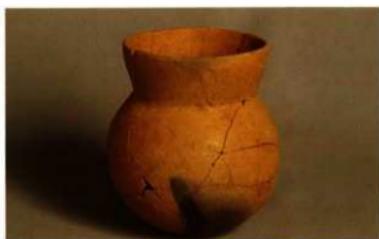
图版31 周溝出土形象埴輪片（第9図 12）



图版32 ST16出土土師器（第11図 14）



图版33 ST16出土土師器（第11図 13）



図版34 ST16出土土師器（第11図 15）



図版35 ST16出土土師器（第11図 16）



図版36 ST16出土土師器（第11図 17）



図版37 ST16出土土師器（第11図 18）



図版38 ST16出土土師器（第11図 19）



図版39 ST16出土土師器（第11図 20）



図版40 ST16出土土師器（第11図 21）



図版41 ST16出土土師器（第11図 22）



図版42 ST16出土鉄針（第12図 23）



図版43 ST16出土白玉（第12図 24～106）



図版44 ST17出土須恵器（第14図 106）



図版45 ST17出土須恵器（第14図 107）



図版46 ST17出土須恵器（第14図 108）



図版47 ST17出土須恵器（第14図 109）



図版48 ST17出土須恵器（第14図 110）



図版49 ST17出土土師器（第14図 111）



図版50 ST17出土刀子（第14図 115）



図版51 ST17出土小玉



図版52 ST17出土須恵器（第14図 112）



図版53 ST18出土須恵器（第15図 116）



図版54 ST18出土須恵器（第15図 117）



図版55 ST18出土須恵器（第16図 118）



図版56 ST18出土須恵器（第15図 119）



図版57 SD5出土須恵器（第18図 120）



図版58 SD5出土須恵器（第18図 121）



図版59 SD5出土須恵器（第18図 122）



図版60 SD5出土須恵器（第18図 123）



図版61 SD4出土土篩器（第20図 124）



図版62 遺構外出土瓦（第22図 125）



図版63 遺構外出土須恵器椀（第22図 126）



図版64 遺構外出土土鍤（第22図 127）

報告書抄録

ふりがな	しもきたかた1ごうふんしゅうへんいせき						
書名	下北方1号墳周辺遺跡						
副書名	共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第71集						
編集者名	竹中 克繁						
編集機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL (0985) 25-2111						
発行年月日	2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
下北方1号墳 周辺遺跡	宮崎県宮崎市 下北方1号墳 5855-2 外	45201	31°56'30" 付近	131°24'45" 付近	2007.7.2 2007.8.30	423	共同住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下北方1号墳周 辺遺跡	古墳	古墳	古墳周溝 地下式横穴墓	埴輪 土師器・須恵器	前方後円墳に伴う 大型地下式横穴墓		

宮崎市文化財調査報告書 第71集

下北方1号墳周辺遺跡

共同住宅建築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年3月

発行 宮崎市教育委員会